五月興行
文樂座
人形淨瑠璃
文樂座
四ツ橋

新緑五月に映ゆる

鄕土藝術の名作陣

青葉薫る明朗五月。わが鄕土藝術の殿堂文樂座は愛に清新と潑溂の大饗宴を展きました。名だたる傑作に巨頭若手新進を配し元祿享保の世の艶かな相とその鄕土色の芳香を最も鮮烈に……皆樣に滿喫して戴くやう大盛陣を張りました。此度上場の『菅原傳授手習鑑』(通し狂言)は本格上演と珍しては、八年振で斯く巨頭連の總出演にて、最近 高貴のお方の御臺覽を博したる寺子屋をはじめ精鋭各極め附の語り場に御座あます。また蠹には敎護聯盟主催のマチネーに依つて都下男女學生に絶大の感激を與へました。愛に鄕土藝術の華絢なる全幅を竭してみなさまの御光來をお待ちしてあます。何卒爽やかな場内の感じと、懷古的な薫りに滿つあなたの『文樂座』へとお運び下さい。

昭和六年五月

四ツ橋

文樂座

昭和六年五月一日初日

初日 午後二時 開幕
二日目より 午後三時 開幕

二日目よりの・御觀覽料・

一等椅子席 御一名——金三圓
二等席 御一名——金一圓五十錢
三等席 御一名——金八十錢
一等お座席 御一名——金三圓五十錢

一等お座席
一等椅子席 は五日前より
前賣切符發賣致居候

前賣切符 南四七一一番
專用電話 七四〇八番
電話南 三七八八番

お草履の準備は御座あますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツト廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷
永井日英堂印刷所
大阪市西區土佐堀通一丁目
長三〇三八番
四九四〇四番
四九四一四番
(44) 土佐堀

文藝倶楽部 大天竺商標大天

新案 大天竺商標大天竺商紙

三味線

大天竺商標大天竺商紙

千葉縣市川市八幡五番地

千葉縣市川市北建初製業株式會社

・五月興行・

文樂座人形淨瑠璃

二日目よりの 豫定時間表

（左記時間は豫定につき日によって多少の遲速は御諒承願上候。）

前

菅原傳授手習鑑

加茂堤より寺子屋まで

加茂堤の段（午後三時より三時二十分まで）

御休憩時間　十分間

杖折檻の段（三時三十分より三時五十五分まで）

東天紅の段（三時五十五分より四時十五分まで）

相丞名殘の段（四時十五分より五時廿五分まで）

御休憩時間　十五分間

車場の段（五時四十分より六時迄で）

御休憩時間　十分間

茶筌酒の段（六時十分より六時四十分まで）

喧嘩の段（六時四十分より六時五十五分まで）

櫻丸切腹の段（六時五十五分より七時四十五分まで）

御休憩時間　二十分間

寺入りの段（八時五分より八時二十分まで）

松王首實檢の段（八時二十分より九時三十分まで）

御休憩時間　十五分間

切

戀飛脚大和往來

新口村の段（九時四十五分より十時三十五分まで）

（舞臺意匠　松田種次）

人形芝居について

◇人形芝居發達のこと
◇文樂座なり立のこと
◇人形頭說明のこと

今から見ては簡單なものに相違なかつたけれども、後世人形と呼ぶ種類の物は、日本でも遠い昔からあつたのであります。其れは傀儡子に始まつたもので、傀儡子の名は已に十餘年前に『和名抄』や『新猿樂記』『雲州往來』に見えて居り、傀儡子の輪廓は、王朝末期の文章博士大江匡房の『傀儡子記』に傳はつて居つて、傀儡子は遊牧の民で、男は狩を表業に、木偶や土偶を舞はせたと御座います。其當時に、四三と云ふのが傀儡を舞はせた事が『散木奇歌集』に見えて居ります。手遣ひの幼稚な物には相違なかつたでせうが、多少の糸が附いて居たかも知れない、と云ふ想像は出來ない事もありません。其後傀儡子は、門附か辻立で命脈を維いで居たらしう御座いますが、淨土宗の起るに至つて、傀儡子の大方は淨土宗の行者になり、特技の人形を舞はして勸化の効を顯はしたものらしく、所謂首掛け芝居の形式ではあつたが、佛菩薩の本緣や、寺社の緣起、即ち謂ふ所の本地物を語る說經と結んで、人形舞はしは自然と諸國に擴がる樣になりました。之れが人形舞はしの擡頭する遠因だつたと思はれます。而して、其内には例の三味線が渡來して來るし又お粗末ながら淨瑠璃といふものも出來た、即ち京都の目貫屋と云へるが西の宮から人形舞しを誘ひ出して、茲に始めて三味線に上した淨瑠璃、又それに合せて舞す人形と此三者が綜合される事に成りまし

たのが、慶長年中、即ち徳川の始頃ですが、忽ちにして京では四條五條の如き或は江戸の堺町とか葺屋町とか、櫓が立つて此人形芝居が繁昌したのであります。順序として當然此頃には最る人形の類も増してはゐたのですが、然し舞臺などは固より無く其人形とて首があるばかり、遣ひ手の手が人形の着物の裾から袖口へ出されて舞されたもので、大阪の石井飛彈掾が始て其手足の工夫もしたものですとか。由來此掾號なるものは人形師の所有なりしを後に淨瑠璃太夫の勢強くこれを專らにするに至つたとの事。さて竹田のからくり人形が出來たり、野呂松のからくり人形が出來たり、次郎三郎が、おやま人形を使つたり、殊には彼の元祿時代になると大阪へ義太夫が現はれて竹本座をはじめ、又近松翁が現はれて此義太夫節のために人形芝居に最も適切な名淨瑠璃を淨山書き卸し、しかも其人形遣ひとしては辰松八郎兵衛と云ふ名人が出て、今の出遣ひの如きも此人によつて始まつたと云ふのが、始めは此人形を下の幕と上の顔隠し幕の間から出して遣つてゐたので、畢竟人形の動くに隨つて自然遣ひ手の身体も動くのを見好くないから黒幕の蔭に黒頭巾して遣つてゐたものを、愈々今度八郎兵衛が袖を着け手摺を離れ無

量の手妻を遣ふに其全身少しも亂るゝ事がないといふ評判を取つたのであります。加之他方また豊竹座の出來るあり、即ち西と東と同じ大阪の地に於て太夫三味線、作者から人形遣ひと全く競爭的に繁昌を來したのですから、從つて其進歩發達は眼覺しいものがあり、道具建から人形衣裳總ては美々しく立派やかを盡し、舞臺大幕の上に小幕を引くやら山簾を本山の張ぬきにするやら、太夫も出語りをするやら、例へば人形にしてからが先づ眼が動き、指先が動き、享保の末には竹本座『大内鑑』の與勘平彌勘平が腹をふくらまし、元文になると豊竹座『武烈天皇

議』の佐手彦の眉を動かしはじめるなど、非常に發達を遂たのであります。即ち言を換れば當時名人の遣ひ手が輩出した次第で、中にも吉田文三郎の如きは享保始め竹本座の『國性爺後日合戰』に初出勤錦舍の出遣ひに片手の晴業を示して以來といふものは實に此人形については工夫を凝らしたもので、其一例を擧ぐれば『兎祭』の人形に始て帷子衣裳を着せるとか、或は其遣つた一寸女房おたつに桔梗の帷子、黑繻子の前帶淺黃の綿帽子を着けさせた如き、今なほ歌舞伎で眞似てる所事實此時代といふものは操盛んを極めて歌舞伎はあれど無いも同然、幟は林立して其勢力は實に驚まじい有樣であつたと云ひます。江戸とて矢張之と同じく、慶長の昔薩摩淨雲が淡路の人形舞しと此人形芝居を始めて以來、各派の淨瑠璃芝居が誠に繁昌してゐたのですが、享保に一端大阪の義太夫芝居が入つて來てからと云ふものは又漸次に其勢力節圍と成つてしまひ御案内の同樣に歌舞伎狂言などは全く此人形の眞似のみ演てゐたものであります。前云ふ辰松も三郎兵衛も共に江戸へ來て其妙技を揮つた事があるのです。兎も角も此人形芝居の全盛は凡そ百年間、實曆から明和以後になると漸次本場大阪でも亦江戸の方でも其勢力は歌舞伎に奪はれ、結局あの大阪の新興北堀江座すらも大した事には成らなかつたと見るべきであります。然し此間に在つても人形は其一個に所謂黑坊四五人も掛かり、或は出遣ひ二人も掛かる事、其他太夫の引拔早替などのケレン早業は愈々進歩を見せたので、而も操芝居としては前述の如く、其後は盛んならぬ各座の起伏消長が今日に至れりと云ふ次第で、それも今や獨り當大阪の文樂座が現存するのみで他には語るべきが無いのであります。さて當文樂座は百餘年の昔淡路の人植村文樂軒が大阪高津區に櫓を起したのに始まり、一時中絶しましたのを十七年終に東區淡路町五丁目

御靈神社境内へ移つたのであります。以來發展を來たしてゐましたが大正十五年晩秋不慮の災禍に喪失しましたが機を得て昨昭和五年一月四ツ橋に新築開場した次第であります

而も日本にこれ一座きりと云ふのは心細い次第で、彼の能樂と同樣日本の古典的舞臺藝術として、之を永遠に保存すべき、怖らくは國民的義務があらうかと考へます次第で御座ゐます。序でながら此人形は大體、首胴、手及び足の四部に分ける事が出來、而も其首あるひは頭につきましては勿論大まかではあるが大體の役々が定まつて居ります。例へば、けんびし(檢非違使)と云ふのは、竹本座の『用明天皇職人鑑』の時檢非違使の役に使つたから此名が出たので其後は廣く世話時代共に用ひられて、例へば『寺子屋』の源藏、『妻八』の八郎兵衛、或は『千本櫻』の銀平、『陣屋』の盛綱のごとき、なほ之の眼り目なるはあの盲兵助などに使ひます。今では實盛なども之ですが然し南水漫遊などを見ると別に成つて居るやうであります。それから矢張南水漫遊には素盞嗚とありますのが今の所謂孔明と呼ぶ頭で由良之助などにも使ふ事があると云ひます。兎もあれ菅相亟や『潯雪』の兵衛、あるひは『紙治』の孫右衛門などを勤める首で矢張竹本座へ近松が書いた『日本振袖始』から出た人形だと申します。それから若男といふのは源太とも呼んでゐるとか聞きますが持役としては『朝顔日記』の駒澤に『太十』の重次郎、その眼隅へ張を入れ其眉を引きつめると『阿古屋』の重忠に成つたりし他種類の若男は敦盛の役などをすると云ひます。又所謂おやまの中にはおむすと云つて之は勿論娘の事で『野崎』のお染『壷坂』のお里『妹脊山』のお三輪などを勤めるのもあります。南水漫遊に傾城とあるのも多分之と同じものかと考へます。斯んな具合で今云ふ南水漫遊には凡そ廿六種の人形品目が擧げられて居るのであります。

通し狂言

前　菅原傳授手習鑑

加茂堤の段

櫻丸　豊竹和泉太夫
八重　竹本町太夫
三好清貫　竹本長尾太夫
松王丸　竹本文太夫
梅王丸　竹本長子太夫
時世の君　竹本播路太夫
苅屋姫　竹本龜久太夫
竹澤團六
鶴澤芳之助

この淨瑠璃は延享三年八月竹本座初演に初まり、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳等の合作で、當時竹本座の衰運挽回のために作者達は天滿宮へ祈願を籠め必死の覺悟で各自分擔書下したのがこの淨瑠璃で果然好評で翌年三月まで打續け、竹本座を再び隆盛にした因緣深い狂言である、殊にこの淨瑠璃に於て興味を覺ゆるのは『骨肉の別れ』といふ同じ題目の下に各持場を定めて筆を執つた卽ち『道明寺（相丞名殘りの段）』は松洛『佐太村（櫻丸切腹の段）』は千柳『寺子屋（松王首實檢の段）』は出雲と三人の作者が腕比べをした逸話が貽されてゐる。

（床本）加茂堤の段

引捨る車は松に輪を休め、舍人二人は肘枕二輛並べし御所車かたへは藤原かたへは菅原道眞公の名代は左中辨希世。時平公の代參は三

善の清貫。加茂明神へ御願の祈願。神子が湯浴の其の間眠るむまさは加茂堤、夢に夢をや結ぶらん、松吹く風に菅原の舎人梅王丸目をさまし、コリヤやい松王丸そちが主の時平公は短氣者でも根が大鳥。名代にわせた清貫殿は短いくせに根が悪者呼使を謂ぬ内目を覺して行かいでな、ホウ梅王の云る〻事はいのこなたの主の名代に來た希世殿こそ大邪人。蓼喰ふ虫も好き〻とあのわろを弟子にしたら代參におこしたりなさる。菅亟相のお心がしりたい。イヤそりやそち達が少ささ了簡とは違ふ聖人の胸の廣さはこちらが身にも覺の有ること。とき世の宮樣の車を引櫻丸とわれとおれと三人は世に希な三ツ子。顔と心はかわつても着るものは

人形

松王丸　吉田榮三
梅王丸　吉田玉松
櫻丸　桐竹紋十郎
三好清貫　吉田玉市
時世の君　吉田文之助
荊量姫　桐竹紋太郎
八重吉　田扇太郎
仕丁大ぜい

三人一つしよひよんなもの産だと親父が氣の毒に思ふたをお聞きなされ三ツ子は天下泰平の相舎人にすれば天子の守りとなる成人さして牛飼に差し上げよと。菅相亟樣のお取成で御扶持迄下され。親四郎九郎殿は今佐太村の御領分に御寵愛の梅櫻松を預り安樂に暮して居らるる其ちようあいの三木の名を我々にお付なされおれを兄のお心でか梅王丸とお呼びなされて召使はる。其の方は松王丸櫻丸は宮の舎人るぼし親といふ御恩のお方、家をへだて〻奉公する共、必仇疎に思わぬがよいぞよマ〻くど〳〵〳〵と永談義供人もふとき世の宮もお參りなされ牛休めに櫻丸も來そうなもの。何んぞ用があるか。ハテ佐太村の親父殿から。來

月は七十の賀を祝ふ程に三女夫連でこいと人おこされた。其の事いはふと思ふてソリヤ銘〳〵に人が來てよふ知つて居る。思へば親じどのはおわづからづに子三人と。果報な人ではあるわいな。と兄弟ばなしの其の中へ同じ胤腹一時に生れて年もおなへどし、どれが兄とも弟とも梅と松とに櫻丸。三幅對の車引き、こかげに一輛引きすて〻堤の上から是は〳〵ふたりともゆつくりとして居る。御神事も早半過り。呼立られぬ中に行つたらよかろと。まがほでいへば梅王丸、御しんじがすんだら宮樣からお立であろが。そちや又こゝへ何しに來た。イヤこちの宮樣は神司の方でお休憩ある故お立の程がしれぬ。こなたしゆの乘せて來た御名代の衆は禁廷の御用が有ると立騷いで居たぞや。油だんして呵られまいといふに松王いか樣。役なしの宮樣と時平公の御目鑑で。御用繁き清貫樣とは違ふ。何時しれぬいざ行こと。車にかゝればヤレまて松王。清貫樣がお立有れば此の梅王がおともした希世の卿も同然。萬一お立でない時はあの大勢の群集の中へ二輛の車を引かけて、けがさしてもそこれても不調法は舍人の誤まり。一走りいて樣子を見て、とりにかへる迄の事。休んだかわりじやサアこいと。引連立つて兩人は宮居の方へ走り行。あと見送りて櫻丸。ハヽ〻一ばいくふていたり〳〵と。獨言して相圖の手拍子招けば招かれ戀草のつゆふみ分けて十五六。被の風の優しきは菅亟相の御娘。かりや姫とて色も香も文は父御のお家がらくどきおとして宮樣にあわせませんと後に付く供は八重迚花めきし櫻丸が自まんの女房先へ廻りてコレこちのお人。首尾はよいかと問へばうなづきよい共〳〵。けふ此加茂堤は御車の休どころ人どめして一人も通さぬ。ねづみの子もないしよと思ひ、宮樣をそびき出して來た所に梅王丸や松王がどんぐり目玉にほつと。くたびれ。一生につかぬうそを又ついてまんまとちらして仕廻ふた姫君さまはづかしそふな顏せづとも。おいで〳〵ドリヤ開帳つかまつらふと。車のみすを引上ぐればとき世の宮は面はゆげに姫はなほしも顏見合せにつと笑ふて袖おほふ。サア爰らか下々と違ふて、とび付か

して輕業もさせにくい。女房どもくらやみにしたひなあ。何んのいな。ひるじやとて結構な車の内エ〜すばやいやつでは有るぞ。我等はしばしおいとまと。こかげへはいればそれ〳〵こんな時には男はじやま。サお姫さま。申上げたい事あらばえんりよなしにおつしやれと。つきやられて苅屋姫。千束の文の御返事に首尾有らばとの御すさみ有りがたいやら嬉しいやら。けふのこの首尾待かれて。おしかりうけに參りしと袂くわへて宣へば。とき世の宮も十七のいと、まだ若き初戀に何んとい〳〵よる品もなふ。櫻丸がいかい世話文見る度にいやまさり、あひたかつたに。よふこそ〳〵さぞ春風で寒かろと。後は姫の身にこたへ春風よりも戀風がぞつと身にしむばかりなり。車のかげより櫻丸ぬつと首出しこりや女房。早ふ配剤仕おらぬかと、せり立られてチ〜それ〳〵春風でお寒いとおつしやる憚り乍ら御車を暫しの内の風しのぎ御めん有つてと姫君を。むりに抱き上げ押入れ二人は飛退きこりや女房ども、有り樣は、そちが働きよふまあ、たづれあふたな。こなさんの敎への通り内裏上臈の形にやつし社家の内へずつといて姫君のおそばへ通り、櫻丸が女房八重でござりまするとと申上げたれば。あなたにも。待ち兼れてござつたかしてよふおじやつた。もふ、いこかと。こしもと衆を待して置て裏道から忍んでお出チ〜其の筈〳〵。此中から手ぐばいして菅相亟樣の筆法傳授に取こもつてござるを幸。お袋樣へ神參りと願はせ。おさもの衆には、口藥、水まく樣にのましておいた。その水で思ひ出した。追つ付お手洗水がいろそよ。神前の水汲んでこい早ふ〳〵とせり立てられて女房は、神前さして汲に行。後は氣休め一休みと思ふ所へ三善の清貫、官人仕丁に十手もたせ裝束卷上げかけ來り。ヤ

ア夫におる櫻丸おのれ最前とき世の宮を、奉幣もすまぬ中連れ退いたとの風ふん。何國へ供したサアぬかせと、せちがいかゝれば存ぜぬ〳〵。下さして上の事。そちをとつくとお尋ねといわせも立づ。ヤアぬかすまい。兼ておのれがとりもちにて、物くさい事きいて居る。とり分け今日は御腦平ゆの神いさめ、其の場所へ來て、不淨があるときつと、捕へて罪に行ふ、有樣に、ぬかさずば引とらへて拷問する、それ繩かけよと、下知の下、おつとり卷を、身がまへし。知ぬといふたら金輪際、ならくの底から、天迄しらぬ。れようじ召さると片つばし。下手のお鞠のけて〳〵蹴踏。足のあんばい見せようかと、ぐつとふみ出す。兩足は、顏に似合ぬ古木なり。シヤ下郎めが味をやる。さい前から見る所が、車の内に人こそ有れ。みす引つちぎり改めよと、いふにしたがい、立寄る所を、首筋つかんで投退け〳〵車は舍人があづかり物。命があらば奇つて見よと。かゝるをけとばしはれとばし、十手もぎとり、かたつばし、なぎ立〳〵追て行。其の間に宮と姫君は人に見れて叶はじと、車の内より飛おり〳〵、さすが若氣の一筋に、のがれて旅のかり衣、何國ともなく落給ふ。すき間を見て清貫が、取つてかへして車の内、引明見れば内は明がら。南無三寶見ちがへた、舍人めが戻どつたら、大ていではあるまいと、下道さしてにぐるあと。まもなくかけくろ櫻丸。御二方の見えぬにびつくり車を見れば、宮の書おき。何々見つけられて、はづかしめをうけふより、立のくとある文章にハツト驚き胸は板。イデ追つ付いて御供と、駈行向ふへ女房八重、サア是お手洗くんできた、と見せるをはれのけ、ナニ手洗所か、清貫めが車の内、詮議せんと來りし故、見つけられじと二方は、何國ともなふ落な

杖折檻の段

豊竹つばめ太夫
鶴澤叶
豊澤仙糸

人形

立田の前　吉田小兵吉
苅屋姫　桐竹紋太郎
宿彌太郎　吉田玉松
伯母覺壽　吉田文五郎
土師兵衛　桐竹門造

されたヤアそりやマア本かさ女房は、びつくりぐわつたり、シテまあ、こなたは、こりやどこへ。ヤアどこどころか。元姫君は菅家の御養子。實母は河内土師の里、菅相亟の御伯母君。先此方へ心ざし、後をしたひ奉る。汝はあの御車を、宮の御所へ引て行け、すておいては、後日のとがめ成ほど、そうじやこなさんの姿にやつして引て行、どれ白張さうけさつて、後案じずとも行かしやんせ。チヽ合點と白砂け上げ、飛ぶが如くにかけり行。八重ばやがて夫の姿。白張肩にひつかけて車の牛を引直し、させいほうせいくヽ一ばい引けどもおそい牛の足。エヽどんくさいと後からおせば車もくるくヽと。廻る月日は不成就日か、御二人樣のくえ日か、夫の爲には十方ぐれ鬼宿車をまだら牛、追つ立てヽこそ立かへる。

（床本）杖折檻の段

菅亟相の御別れ對面ありたき覺壽の願ひ流人預る判官代輝國の用捨を以て河内の屋敷へ入り賜へば老の悦び大かたならず馳走の役人夜晝のわかちもしらぬいそがしさ立田の前は船場にて思はず逢たる苅屋姫、密に伴ひ歸れども家來も多くばしらぬがち

隱し置たる小座敷の襖をそつと押開きさぞ淋しからう精もつけふ、顔見に來たいは山々なれど、去りとては何やかや用事の多さ母樣の傍放されねば得參らぬ、今が能透、誰も來ぬ氣晴さしにサア笑へと、心づかひもばらからの姉の情けを苅屋姫、一間を去る目は涙、齋世樣に別れてより段々お世話に預る上父上樣にもお目にかゝりせめて不孝の申譯、それも叶はぬ物ならばと我身の覺悟極めても產の母樣覺壽樣今の母樣都の弟親王樣の御事は猶しも忘れぬ得忘れぬ、心を推量してたべと歎げば俱に涙ぐみ悲しいは道理〳〵さりながら相亟樣に逢ぬとて短氣な事などかんまへて思ひ出してもくださんすな、母樣のお願ひ立つて此屋敷に御逗留どふぞ首尾を見つくろひ母樣のお耳へ入れお差圖請けてと餘所ながら口むしりかけて見たればな、こちの思ふた坪へはいらず母樣のかたくろしさ、お果なされた郡領樣に少しもかばらぬ行儀作法我が產だ子だも人にやれば、先きこそ親なれこちは他人それを親じやの娘じやと思ふは町人百姓の譯をばしらぬ子にあまささ、幸先惡い訴訟もならず外の事に言紛らし其場は濟んでも始終が濟ぬ、お宿申すもけふで三日時氣空も吹き晴て下り日和に直つたと船場から注進故今宵八ツがお立とて輝國殿の旅宿よりしらせによつてお立の用意、今やなんどと思ひの外手詰になつたがどふしてよからふ膝共談合コレ泣かずとよい智惠出して下さんせと、とつ置つの胸算用後にすつくと宿彌太郎よい分別者是に有ヤア太郎樣いつの間にムゝいつの間にとはコレ立田連添男の目をぬいてこつそりと取込で大それた身の上咄し苅屋姫はそなたが妹、薫の上から養子の仔細しつては居れど京と河内、武家と公家とは位も格別菅相亟の伯母風吹かし聟めかしてもいつかなめかれぬ位負名斗り聞て逢たは今てんと御器量、齋世とやら樣とやらが現樣にならしやつたも道理じや〳〵姫の顏見ぬ先はおれも女房は揚貴妃じやと思ふたが、くらべて見れば無揚貴妃そなたの名もかへねばならぬ、ソリヤ又何とへハテ知れたお次の前ヱゝずば〳〵と出放題母樣へも隱して居る。此譯何

共言しやんすなそれは氣づかひ仕賜ふべからず明日のお立しらされし輝國の旅宿へ參り此間御逗留心づかひの一禮申いよ〳〵刻限相違なく一番鳥の鳴のが相圖申合せに往てこいと覺壽の言付只今參る道でよい思案が出たらコレ戻つて言お次の前アレまだじやら〳〵轉業口チット閉口いてこふと表の方へ出て行、後を見やつて苅屋姫、あなたがおまへのお連合身の上の事に取紛れ御挨拶も得申さぬ、アヽ是挨拶はいつでもなる事こちの願は延されぬアヽどふがなと案じ煩ひヲヽそれ〳〵所詮母様にいふたとて埒の明ぬは知れて有る連合も留主母様もお傍にござらぬ折からなればお前を私が連ていて呵られふがどふならふが後はまゝいなサアこなたへと姫の手を取るうしろより不孝者どつちへ行と襖ぐはらりと母の覺壽、杖ふり上て飛かゝるを立田は、はつと抱き留めお前に明て言なんだ隱したお腹が立ならば此立田、打も擲きもなされませ此中ものたまはぬか人にやれば我子でないとおつしやつての折檻は母様共覺ませぬ、相亟様の御秘藏姫、杖棒あてゝよいものかナア自を〳〵と姫にかばつて身をいとはずイヤお前に科はない不孝な自打賜へと、立田を押やる杖の下いや〳〵お前は打されぬイヤこな様はと折檻の杖をあらそふおとゝい思ひ老母は猶もいかりの顏色、コリヤ立田おりや他人には折檻せぬ養子にやつた相亟殿はおれが爲には甥の殿子にやつたは姫は甥孫、親も赦さぬ徒したへと姫の手を取るうしろより不孝者どつちへ行と襖ぐはらりと母の覺壽、杖ふり上て飛かゝるを立田は、はつと抱き留めお前に明て言なんだ隱したお腹が立ならば此立田、打も擲きもなされませ此中ものたまはぬか人にやれば我子でないとおつしやつての折檻は母様共覺ませぬ、相亟様の御秘藏姫、杖棒あてゝよいものかナア自を〳〵と姫にかばつて身をいとはずイヤお前に科はない不孝な自打賜へと、立田を押やる杖の下いや〳〵お前は打されぬイヤこな様はと折檻の杖をあらそふおとゝい思ひ老母は猶もいかりの顏色、コリヤ立田おりや他人には折檻せぬ養子にやつた相亟殿はおれが爲には甥の殿子にやつたは姫は甥孫、親も赦さぬ徒して大事の〳〵甥の殿流され賜ふは誰が業憎ふて〳〵コレ此杖折る程擲かねば相亟殿に言譯立ぬ六十に餘つて白髮天窓、連合に別れた時剃をそらさぬ立田の前尼になつては便がない力もないと留られて法名ばかり覺壽と呼ばれ邪魔に思ふた此白髮ぐけふと言けふ役に立田、天窓を剃つて衣を着れば打擲の杖は持たれぬはい、傍杖望む立田からと走り寄つて丁〳〵打るゝ姉妹打母も俱に涙の荒折檻アヽこれ〳〵伯母御前卒爾の折檻仕賜ふな齋世の君の御不便有る娘に疵ばし付賜ふな父を床しと慕くる苅屋姫に對面せん、是へ伴ひ賜れと障子の内より相亟の御聲高く聞ゆるにぞ老母は杖をがらりと投げ捨、わつと叫んで伏轉び暫しこたへもなかり

しが産の親の打擲は養ひ親へ立る義理養ひ親の慈悲心は産の親へ立る義理、あまき詞も打擲も子に迷ふたる親心、逢てやるとは姫よりも母が悦び、詞には言盡されぬ結構な親持た持た〳〵と目に持た涙の限り聲限り二人の娘は何事もお慈悲〳〵と斗にて泣よりほかの事ぞなきコレのふ爰から禮をいはふより、こいと有ばいざ傍へと、隔の襖押し明くれば菅相亟は見へ賜はず、逗留中作られし主の姿の木像斗コハそもいかにと苅屋姫逢てやらふと宣ひしは母さまの折檻をとゞめん爲、とにかく不孝な自故お逢なされて下されぬか今物をおつしやつたは父上に違ひはないに、木で作りし父上様が但しは物を言ひしか又は何處ぞへ隱れてかと立て見居て見うろ〳〵のふさはがしや苅屋姫、相亟の逗留中御馳走申ば奥座敷爰へ餘程間數も隔たり先程聲のかゝつた時爰へはどふしてござつたと思ひながら嬉しさにわきまへなく見れば此木像斗り次手ながら苅屋姫咄して聞さふ、逗留の中に主の像畫てなりとも作つて成と伯母が筐に下されと顧ふた日から取かゝり、初手に出來たは打わり捨二度目に作り立られしを同じく是も打碎き三度目に此木像作り上て、おつしやるには前の二つは形ばかり、勢魂もなき木倡人是は又相亟が魂殘す筐さて下されし主の姿、ものを言まいとも言れず帝への恐れ有ば逢たふても逢れぬ親子、木とな思ひそ苅屋姫ものおつしやつた父上に逢つて嘸嬉しかろ母も本望とげましたと親子三人悦びの中へのさ〳〵立歸る太郎が爺親土師の兵衛、覺壽これにおはするか、おお客人のお立も明朝出立のこしらへ嘸取込、役に立たずとお見まひ申手傳ひでも仕らふと參りがけに輝國殿の旅宿へもちよと付け屆け伴が幸ひおり合はせ、用意も大かた出來たと聞く先は大慶、とかうする内もふ暮相一先づ歸つてお立の時分又參るのも老足なればお邪魔ながら是におろ、心づかひなし下されな、兵衛殿の義理〳〵しい、嫁子の所は内同然、斷に及ぶ事か用が有ば遠慮なくおつしやつたがよいわいの、刻限まではコレ立田そなたの部屋にお寢間をとりや後程お目にかゝらんと姫を連立入賜へば後は親子が小聲になりコリヤ道

東天紅の段

竹本大隅太夫
鶴澤道八

〈〈しめし合した通り太郎ぬかるな氣遣ひなさるな親人と奥と部屋とへ別れ行。座敷〈〈は燭臺照し今宵限りの御奔走とり〈〈騷く。

（床本）東天紅の段

斗りなり土師の兵衛は一間よりそつとぬけ出前栽の勝手覺へし切戸口、鍵捻じ切つて押ひらけば、外から相圖の挾函さし出す仲間徒若黨コリヤやい言付た人數の裝束、亟相を迎ひの、ばり輿、スハといふ時間に合はせと、家來共先へ歸し挾箱引だかへ、月かげもるゝ木の間〈〈うそ〈〈鶏ふ同腹中、親人お首尾は、件のものは參りしか、伜氣づかひ仕るなコリヤ此中に計略の彼一物大事の談合爰へ〈〈と大庭の池のほとりで囁く親子、宵からそぶりに氣をつけて、宿彌太郎に目ばなしせず、立田の前がものかげより聞共しらず宿彌太郎、先ほどお聞きなさるゝ通り判官代輝國迎ひに參るは八つの上刻時平公よりお賴みの、背相亟殺す工面、贋もの仕立むかひと僞り、請取つて途中でぐつ、とはいふものゝ一番鶏がうたはれば姑の片意地名殘りおしんで渡されまい、八つ鶏の啼かぬ先に宵啼する鶏、是に有りと挾函より取り出し、ホゝ皮膚のよい白相國とかふする内、もふ夜半、一調子はり上げ存分にうたふてくれ、一聲聞かれば落付かぬ、親人なぜ鳴ませぬのイヤ其分では鳴ぬ筈宵鳴は天然自然極めては鳴かぬもの、それを鳴かす秘密事、大竹の中へ熱湯を入れ其

人形

土師兵衛　桐竹門造
宿根太郎　吉田玉松
立田の前　吉田小兵吉

上にさまらすれば、陽氣の迫る時節と心得、時をつくる、さまり竹も挾函に入て來た、臺子の湯もたぎつて有る、釜ぐちをつと取てこい、おゝ取て來るは安い事、湯を仕かけても鳴ぬ時はハテくど〳〵、鳴かぬときは又分別と、親子が工み、なむ三寶、一大事、先へ廻つて母樣へおしらせ申て、イヤそふしてはイヤ、いはいでは又こちらが、いふてはあちらがこちらがと、心迷ひし胸なでおろし、宿彌樣、太郎樣は何所にと、尋る聲にはつと二人がはいもうけでん、鷄隱す挾箱あたふたしめて、さあらぬ風情、ヤアこと〳〵しう呼立つるは何ぞ、急な用でも有るか、さもない事なら不遠慮千萬、親人もこの宿彌も肝にこたへて惚りしたといふ顏つれ〴〵打ながめ、おまへ方の惚りより、わしに惚りさゝしやんした、聞へぬ連合舅君、慶むかひをこしらへて、菅相亟樣殺さふとはあなたに何ぞ恨が有か但しは時平に賴まれし欲には馴染の女房も捨、母樣の義理も思はずか、おまへは捨る心でも、わしや得捨ぬ太郎樣、コレ申し、親父樣思ひとまつて下さりませと、舅を拜み夫を拜み、聲も得立てぬ貞女の思ひ涙、操を現せり、兵衛は宿彌に目くばせし、イヤハヤ眞身の異見にあふて親もせがれも面目ない、向後心をあらためる、嫁女此事聞流しに、アゝ勿体ない聞き流さいでよいものか、御得心とあるからは、此世ばかりか未來までかはらぬ夫婦舅君、まだ如月の餘寒もはげし炬燵に膚温め酒一つ上げたい、サアお出と、先に立田がそれそこを、心得太郎が後げさ、肩さき四五寸切られながら、振返つてつかみ付きエゝこれ人でなし卑怯者、一人の手にもたらぬ者、だまし殺しが本望か、女の義理を立てすごし悔しや無念とのゝしる聲、おさほれ立てなと宿彌が下着褄さき口へ押し込みれちふせ肝先ぐつと一抉り、兵衛は前後に心を配り、伜息は絶たか、氣づかひめすな只今さゞめ、扨死骸は問に及ばぬ此大池、体を浮さぬ手ごろの石、袂や帶にくゝりそへ、深みへやれと二人して投込む死骸はくれなゐの、血汐に染る池までも立田が、名をや流すらん、コレ親人是はこれでも濟ぬは鷄臺子の湯を取て參らふ太郎そ

相亟名殘の段

切　豊竹古靱太夫
　　鶴澤清六

人形

菅相亟	吉田榮三
伯母覺壽	吉田文五郎
宿根太郎	吉田玉松
饗迎い	吉田玉市
腰元	大ぜい
仕丁	大ぜい
宅内	吉田玉徳
水奴	大ぜい
茅屋姫	桐竹紋太郎
輝國	桐竹政龜
土師兵衛	桐竹門造

れにはもふ及ばぬ、鳴す仕樣は身共に任せと武士のたしなむ懷中松明手ばしかくともし立、池の中へあかりを見せ、挾函のふた仰向鷄を上にのせ、浮める池の水の面、刀の鐺さし延す腕一ぱいに押やれば動ぬ水も夜嵐に立つや小涙のうれりにつれ半端ばかりながれ行、親人何をなさるゝ事、挾箱の蓋を船にして子供のする業おとなげないあれが何の役に立つハーゝ譯をしらずばいふて聞けふ、慾別淵川へ沈んで知れぬ死骸は鷄を船にのせて、尋れば其死骸の有る所で時を作る鷄の一德思ひ出し、池へしづめた立田が死骸、今一役に立てゝ見るうまい手つかひ、拍子まんが直つてきた。あれ〳〵太郎羽たゝきするは死骸うへか、そりやこそ鳴たは東天紅アリヤまたうたふはさんてんかう、八つにもならぬ宵啼の聲さへかへる春の夜や庭木のれぐらに羽たゝきして一鷄鳴けば萬鷄うたふ、函谷關の關の戸もひらく心地に親子が悦び、これから急ぐは菅相亟むかひのこしらへ氣がせくと、兵衛は出て行く、切戸口、宿彌太郎はたくみの仕殘し。

（床本）相亟名殘りの段

聞して入にけり。早刻限そと御膳のこしらへ。銚子かはらけ熨斗昆布。腰元共に鳴臺持たせ。伯母御。座敷へ出給ひ。百日千夜留たり共別るゝ時はかはらぬつらさ。此上賴は御免の勅諚歸落を松の鳴臺。行末祝ふ熨斗昆布菅相亟も此間心づかいの

御一禮。互に盡ぬ御名殘宿彌太郎在り出、御立の刻限迚早門前迄迎の官人判官代輝國は路次の用心辻固只今旅宿を立申され輿舁の官人に譜代の家來を相添られ只今是へ參上と怪の輿舁入て時刻移るとせり立る菅相亟は悠〳〵と大廣間より出させ給ひ輿に召迄見送る老女人前作てにこ〳〵と泣ぬ別ぞ哀なる。宿彌太郎も御見立門送りして立歸りヤレ嬉しや仕廻が付た覺壽樣も御氣休め寢間へござつてイヤ寢たふても寢られぬはいの寢られぬとは氣色でもアレまだいの客を立て嬉しいと一道な聟殿の悦び一つ昼敷に居ながらの暇乞も得せいでの苅屋姫が悲しかろ人の逢のもけなりかろと。かけかまはぬ立田さへそれで態と呼出さなんだが機嫌よふ立しやつたを悦びにはなぜこぬぞ誰ぞゐて見てこいと云にきょろつく宿彌太郎腰元は立戻り奥にござるは苅屋姫が只お一人立田樣はござりませぬ何じやいぬ内を放れてどこへいきやろ今一度見てこい座敷の隅々かぐれ〳〵。尋々と吟味のきびしさ。提灯手でに若黨仲間幾人あつても行届かぬ花壇築山手分して尋る奥の池の端芝に溜つた生血を見付コリヤ〳〵此血の流込池をさがせと。聞に水心得た奴共飛込〳〵水底よりかづき上たる立田が死骸驚駭く家内の騷動太郎は鼻も動さず殺したやつは内にある全議濟迄門打て家來共動すなとわめきちらせば母覺壽姫もかしこへ轉び出コハ誰人の仕業ぞや先からお顔を見なんだは伯母樣のお傍にと思ひもうけぬ此死骸父上には生別れお前には死別時もかわらず日もかわらず悲しさつらさ一時にかゝる例もある事かと老母に取付き悔泣きチゝ道理〳〵そなたはおれが傍にと思ひおれは、そなたが傍に居ると思ひ違が娘が不運母が因果でおじやるはいと、かつぱと伏て正体なし太郎傍へ立寄て涙が死人の爲にはならぬ女房共への追善には殺したやつをびつぱり切是にて詮議仕らんと椽端に大あぐら男女に限らず家來のやつばら片端から詮議するマアとつ付に居る宅内身が前へ出おろうナイ〳〵ないと御前にかつくばい人は知らず拙者めにおうたがひは御さない筈お死骸を取上げた御ほうびを下されうで一番にお呼出し忝ない義でござり

まするでごはりますヤアまが〳〵しい褒美とは横着者め立田が死骸池にあるを、おのれはどうして知おつた夫かせイヤあのしりも、あたまも見様筈はごはりませぬ池の深みへ芝から傳ふた血を證據にヤアぬかすな提燈の火明りで夫がそれと知る物かうぬが殺してしづめた池外の者がどうしてしろう血の分では云譯は立ぬ是はお旦那無理おつしやる云譯立ふと立まいが池が血へ流込だ其外は存じませぬヤア池が血へ流たとは血まよふて何ほざくきやつ詮議場で水くらはせ白狀さする夫引立と宿彌もつゞいて立所を老母押留イヤ責るに及ぬ詞のてん〳〵嬉しや娘の敵が知れたハア責なとは遁お目高利極つた罪人女共へ手向る成敗大げさに打放す腕を左右へ引ぱれと刀提立寄宿彌イヤ成敗は當の科人けさに切ては只一思ひ苦痛させれば腹が居ぬ娘の敵助太刀は此母後は犇殿刀を借さかい〳〵敷も褄引上向ふ目當は奴にあらず油斷太郎が弓手の、あぢら突込刀に宅内は命拾ふて逃て行宿彌太郎は急所をさゝれもがき苦しむ息の下身共に何の科あつて耄めがと、いはせも果ず覺へないとは云さぬ〳〵我科を人に塗成敗をして見せ立裾ばせ折つた下着の褄先切てある其切はコリヤ立田が口に聲立させぬ無理殺し齒をかみしめ放さぬ褄先切つた事は打忘れ儕が科を儕があらはす極重悪人死骸の前で敵を取母が娘へ手向の刀きも先へこたへたかと大の男を仕留る老女遠に河内郡領の武藝のかたみ殘されし後室さこそしられけれやゝ時移れば判官輝國只今是へ御出と家來が申に老母は驚き相亟は先程お立誰を迎に心得ぬ事ながら此方へ通しませい苅屋姫は奥へ行きやこいつはまちつと苦痛をさすと刀を其儘死骸押退出迎へば輝國も早入來りお迎の刻限御用意よくば早お立と申詞の先折て輝國殿何おつしやる相亟の迎にはそこの家來が先程見へ請取つて歸られたはもふ一時も先の事ヤアこれ〳〵伯母御身が家來に渡したとは旁々持て心得ず鷄の聲に刻限はかり只今鳴た旅宿の鷄八つに參る迎の約束家來と云ふが直に身共が參つたとて刻限も來らず鷄も鳴ぬ先渡したといふては濟まぬ船がゝりの其間伯母御に逢すは武輝國が情の用捨

今日の今に成つて名殘も一倍島へはやらぬ渡したいへばそれで濟と鼻の先な女子の了簡菅相亟の、あだにこそなれ爲にはならぬイヤサコレ偽な申されなイヤ偽は申さぬ庭で鳴た鳥の聲そこへごさつた迎の衆渡したに違はないが請取らぬとおつしやるので娘が最後聟めがあのざま思ひ合せばさつきにきたは贋迎コレ伯母御内の贋動死人のある上贋迎嘘ではあるまゐざん者共のしはざであらふ一時違へば三里の後ぼつ付て取返さんとせきにせいてかけ出す輝國ヤア〳〵判官先待れよ菅相亟は是にありと一間より出給ふ覺壽はびつくり。さつきに別れた菅相亟そこにはどうして〳〵と不審の立も道理なり判官輝國打笑ひぬけ〳〵とした伯母御の偽暫時の仰天相亟是にましましませば輝國が安堵〳〵見へ渡つた此御難儀譯も聞きたし力に成つてしんぜたけれど私ならぬ警固の役目早刻限も移ぬればいざ御立とすゝむる所に先程見へた警固の役人たつた今門前迄何じや警固がハテよい所へ戻られた嘘つかぬ覺壽が證據是へ通し輝國殿へ見せませうイヤ身が名をかたつた贋役人直に逢ては惡かるべし忍んで樣子をうかゞはんと相亟諸共一間の障子引立内に隱れ居る奥に先立警固が大聲コレ老母輝國の名代とけあなずり。とでもない物身共に渡しようぬつけりとさゝれたの、是はめいわく菅相亟を請取ながらとでもないとは何おつしやるアレまだぬつけり相亟は相亟でも木で作つたはこつちにいらぬ肉附きの菅相亟替る氣で持つて來た木像コリヤ此奥にといふに覺壽も心付エゝ忝ない扨は魂を込られし木像であつたかい猶も證據を見届んと心の悦び押かくしこなたの云分合點がいかぬ其木像見せさつしやれチゝしやちこばつた荒木作りサア今見せしと明る戸の奥に召たは木像ならぬ優美の姿菅相亟につと笑ふて立出給へば警固はぎよつと呆顏覺壽も違ひし心當障子の内さ今見る姿心どきまきうたがひながらアゝよふ戻して下さつたかしかに伯母が請取ましたヤアどこへ〳〵そりやならぬと云物の連て歸つて見たのは木像すりかへられたと氣が付てかへに戻つた處ではほんの菅相亟おれが目の惡いのか見所に

よつて替るかいイヤ替らふが替るまいが戻された背相亟いざこなたへと立寄覺壽ヤアのぶさいと突飛し相亟を又輿に乗戸を引立て家來に向ひわいらも様子を見る通いかにしても、あやしい事共此分では歸られず念の爲家捜しすると踏込先に宿彌太郎半死半生のた打苦しみなむ三寶太郎様が切れてござる旦那〳〵と呼聲に警固の中から親兵衛前後もさらに、わきまへず走寄つて引起しコリヤ伜此深手はどいつが所爲相手を知せと氣をせいたりノウ兵衛殿相手は姑アゝわしが手にかけたヤア鞆を手にかけ落付自慢何科あつて身が伜をヤアとぼけさしやんな姫殿そいつが立田を殺した時こなたも手傳ひしやろがの娘の敵切つたが何と贋迎の棟梁殿何もかも現れ時さつぱりと云たゝヱゝ殘念〳〵伜めが出世を思ひ時平公に一味して背相亟を殺さん爲鷄に皆鳴きさせ十が九つ仕おゝせた兵衛が方便腐婆めにかぎ出され殺された伜が敵覺悟ひろげと飛かくるをヤアさはさせじと判官輝國こかけよりあらはれ出覺壽を圍てつい立たりヤアどなたが出てもびく共せぬ兵衛が工の破れかぶれ死物狂ひの働見よと切つてかゝればかいくぐり持つたる刀踏落し利腕摑んでひつくり返し足下に踏付大音上ヤア輝國が家來共贋者めらを片端からくゝれ〳〵と云聲に始のきせいぬけ〳〵に一人も殘らず逃失たり覺壽はとつかは輿の戸の明る間嘸やお氣詰りと内を見ればこはいかに、筐の木像又悔り是はいかにと立歸りこなたの障子押明れば伯母御颯がせ給ふなと背相亟の御詞爰でも悔りかしこでも悔り悔りに心の迷ひどちらがどうじや輝國殿目利なされて下されと問ゝ人も問ゝ人も問ゝ人も剃れ果たる斗りなり相亟重て輝國の迎遲參故睡共なく暫時の間物騒がしく聞へし故うかゞひ見れば兵衛が工太郎が所爲立田の前はゝかなき最後ぜひもなし伯母御の心底さこそ〳〵某是へ來らずばかゝる歎もあるまじと今更悔の御涙イヤ娘が命百人にもかえがたき大事の御身けがあやまちのなかつたを悦びこそすれ何の泣何んの〳〵といふ目に涙のふ輝國殿惡事の元は其兵衛此世のひまを早ふ〳〵太郎も供にと立寄つてもとゞり引上相亟の警固のあり様儕

親子に見せたが本望娘が恨も晴つらんと刀を拔けば息たへたりヱゝ憎いながらも不便な死ざま。うゐ轉變の世のならひ娘が最後も此刀狩が最後も此刀母が罪業消滅の白髮も同じく此刀と取直す手に、もとゞり拂ひ初孫を見る迄とたばい過した恥白髮孫は得見ゐで憂目を見る娘がぼだい逆緣ながら弔ふ此尼種々因緣兩求佛道南無阿彌陀佛と唱れば菅相亟も唱名の聲も涙に回向あり判官輝國大きに感じ伯母御前に先取れ後にさがつた儕が成敗强慾非道の皺頭と水もたまらず打落す覺悟は木像抱かゝえ菅相亟の右手の方御座を並べて直し置兵衛親子が工もあらはれ何もかも納りし此木像の不思議な働きかゝる例もある事かやいやさよ最前も云如く匹夫〳〵が工もあらはれ我急難をのがれしも暫時の睡眠前後を知ず木に彫筆に畫例は本朝名高き繪師臣勢の金岡が書たる鷹は夜な〳〵出て萩の戸の萩を喰唐士にも名畫の譽吳道子が墨繪の雲龍雨を降せし例もあり又神の尊像木佛などの人の命にかはらせ給ふ例はかぞへつくされづ菅相亟が三度迄作直せし物なれば木にも魂備はつて我を助し物やらんざんじやの爲に罪せられ身は荒磯の島守と朽果る後の世迄筐とおぼし召されよと仰は荒木の天神河内の土師村道明寺に殘る威德そなり難き輝國四方を打眺め思はざる義にひまを取夜も明はなれ候へば御立ぞふと申にぞ又改る暇乞伯母が寸志の餞別せん用意の物こなたへと苅屋姫の上着の小袖かけたる伏籠諸共に御傍近く取直させ涙風荒き榊枕餘寒をしのがせ申さん爲伯母が心をだきしめた小袖を島迄召さるゝ樣に輝國の御世話ながら賴まするとありければ是は宜敷進ぜ物笘の香防ぐとめ木の小袖家來に持せ參らんと立寄伏籠に手をかくる相亟暫しと止め給ひ御恩を厚く迄給ふ伏籠にかけし此小袖中なる香はきかれ共名は大方伏屋の苅屋伯母御前より道實が申請し女子の小袖我身にはあはぬ笘身巾もせばき罪人が此儘にお預け申す我子袖と思召立田の前が追善の佛事も供にと伯母御前の心をさとる御詞骨身にこたへ忍び兼思はづわつと聲立て歎に扱はと輝國も心をかんじほれ入覺悟の心は伏籠の內泣たは結句あの子が爲別れに一寸只

車先の段

豊竹富太夫
（鶴澤友作）
（野澤吉左二）

一目伯母が顧ひを叶へてと立寄袖を引きとどめ御年故の空耳か今鳴たは、たしかに鶏あの聲は子鳥の音子鳥が鳴ば親鳥も鳴は生有ならひぞと心の歎きを隱し寄り鳴ばこそ別れを急げ鳥の音の聞へぬ里のあかつきもがなと詠じ捨名殘はつきずおいとまと立出給ふ御詠歌より此里に鶏なく羽たゝきもせぬ世の中や伏籠の中をもれ出る姫の思ひは羽ぬけ鳥前後左右をかこまれて父はもとより籠の鳥雲井のむかし忍ばるゝさすらへの身の御なげき夜は明ぬれぞ心の闇路てらすは法の御ちかひ道あきらけき寺の名も道明寺とて今も猶榮へます御神の生るが如き御すがた處に殘れる物語つきぬ思ひにせきかぬる涙の玉の木槵樹珠數のかづ〳〵くりかへしなげきの聲に只一目見返り給ふ御顔ばせ是ぞ此世の別とはしらで別るゝ別れなり。

車塲の段

松王丸　竹本相生太夫
梅王丸　竹本島太夫
櫻丸　竹本南部太夫
時平　竹本源路太夫
虎王丸　竹本鏡太夫
（豊竹陸路太夫）
（豊竹千駒太夫）
（豊竹辰太夫）
（野澤廣助）
（豊澤吉彌）

人形

梅王丸　吉田玉松
松王丸　吉田榮三
櫻丸　桐竹紋十郎
時平　吉田玉幸
杉王丸　吉田市松
仕丁大ぜい

（床本）車先の段

鳥の子の巣にはなれ魚陸に上るとは涙人の身の喩へ種、菅相亟の舍人梅王丸、主君流罪なされてより都の事共取賭ひ、御臺のお行衛尋ねんと笠ふかく〳〵と深綠土手の並木に差しかゝれば、向ふからも深編笠、我に違はぬ其出立、互ひにそれぞと近く寄り梅王丸か、コレハ〳〵櫻丸、ヤレそちに逢たかつた、マア咄す事聞く事有りと、兄弟こかげに笠傾け、扨先間其方は日外加茂堤より宮姫君の御

後したひ尋れ行きしと、内實八重のものがたり、何とお二方に尋れ逢たか、成程道にて追付奉り菅相亟御流罪と聞より對面なさしめ奉らんと安居の岸まで御供せしに、御對面かなはず、輝國殿の計ひにて、御歸洛願ひの妨げとお二方の御緣も切られ姫君は土師の里伯母君の方へ御出、齋世の宮樣は法皇の御所へ供奉し奉り事治りしといひながら、納らぬは我身の上、冥加に叶ひお車を引く其有難い事打わすれ、賤しい身にて戀の取持、終には御身の怨となり、宮御謀叛と讒言の種拵へ御恩請たる菅相亟樣流罪にならせ賜ひしも、皆此櫻丸がなす業と思へば胸もはり裂如くけふや切腹、あすや命を捨ふかと思ひ詰はつめたれど、佐太におはする一人の親人、今年七十の賀を祝ひ兄弟三人嫁三人並べて見ると當春より悦び勇おはするに、我一人缺るならば不忠の上に不孝の罪、せめて御祝儀祝ふた上と詮なき命けふまでもながらへる面目なき推量有れ櫻王と拳をにぎり齒をくひしめ、先非を悔たる其有樣、櫻王も理りと暫し詞もなかりしが、チヽ道理〳〵我とても主君流罪に逢賜ふ上は都にとゞまる筈なけれど、御館沒落以後御臺樣のお行衛しれず先つ此方を尋れふか筑紫の配所へ行ふかと、取つゝ置いつ心はゝやれど其方がいふごとく、年寄つた親人の七十の賀の祝ひも此月これも心にかゝる故思はず延引互に思ひは須彌大海、ぜひもなき世の有樣と、兄弟顏を見合はせて涙催す折からに、鐵棒引て先拂ひ先退て片寄れと雜式がいかつ聲、櫻王立寄ごなたぞと尋れば本院の左大臣時平公吉田への御參籠出しやばつて鐵棒くらふなと、いひ捨て急ぎ行く、何と聞たか櫻丸齋世の宮菅相亟を憂目に逢せし時平の大臣存分いはふじや有るまいか、成程〳〵、よい所で出つくはしたと兄弟道の左右に別れ尻引つからげ身がまへし今や來たると。

（床本）車塲の段

程なく轟く車の音商人旅人も道をよきる時平の大臣が路次の行粧さながら君の御幸の如く隨身靑侍前後に列し大路せばしと輾らせたり。兩人こかげを飛び出で車やらぬ〳〵と立ふ

さがるヤア何者なれば狼藉する見れば松王が兄弟梅王丸櫻丸ゝ聞へた主に放れ扶持にはなれ氣が違ふての狼藉か但しは又此車時平公と知つてとめたかしらひでとめたかへん答次第用捨はせぬと白張の袖まくり上つかみひしがん其勢ひ梅王丸ゐひ笑ひヘーヘハーハヘーヘハーヘーヘーヤアいふな〳〵氣も違はれば此車見ちがへもせぬ時平の大臣寮世親王菅相亟ざん言によつて御沈落其無念骨隨に徹し出合所が百年めと思ひもうけし今日只今櫻丸と此梅王牛に手なれし牛追竹位自慢でくしひ肥た時平殿のしりこぶら二ツ三ツ五六百くらはされば堪忍ならぬ言はれぬ主のかた持顔出しやばつて怪我ひろぐなヤア法に過ぎた案外者アレぶちのめせ引くゝれと供の侍聲ごえに前後左右に追取り巻兄弟は事ともせず取つては投退つかんではぶち付け〳〵投付ればあたりに近付く者もなし（まてろふ〳〵まてろふやい）ヤア命しらずのあばれ者いづれもはおかまひ有な御主人の目通り御奉公は此時節兄弟と一つでない忠義の働きお目にかけんコリヤやい松王が引きかけた此車とめらるゝならとめて見よやいと鼻づら取つて引出す車ホーウ櫻丸梅王丸爰になくばいざしらず一寸なりとやつて見よヤイ車の内ゆるぐと見へしが現はれ出たる時平の大臣ヤア牛扶持くらふ青蠅めら轅にとまつて邪魔ひろがば轍にかけて敷殺せヤア左いふ大臣を敷殺さんと粋けし轅を銘々提げ大臣を打んとふり上るヤア時平に向ひ推參なりとくはつと睨し眼の光り大千世界の千日月一度に照すが如くにて遮の梅王櫻丸思はず後へたぢ〳〵五体すくんで働かず無念〳〵と計りなり何と我君の御威勢見たか此上に手向ひすると御目通りで一討と刀の柄に手をかくればヤア松王待〳〵雁金巾子の冠を着すれば大君同然大政大臣となつて天下の政を執行ふ時平が眼前血をあへすは社參の穢れ助にくいやつなれ共下郎に似合松王が働き忠義にめんじて助けてくれるハレ命冥伽なうづ虫めらウーアハウーアハ〳〵〳〵〳〵アハーーーーーと邊をにらんですゝみ行ふり返つて松王丸よい兄弟をもつて兩人共に仕合せ者命を拾ふた有がたい忝ないと三拜せよといはれて兩人くはつ

茶筌酒の段

豊竹駒太夫
鶴澤重造

人形

白太夫　吉田小兵吉
百姓十作　吉田光之助
八重　吉田扇太郎
はる　吉田文作
千代　吉田文五郎

とせせき上エ〜おのれにも云分有れ共親人の七十の祝賀儀濟までナフ梅王チ〜其上では松の枝々切折つてかたきの根をたち葉を枯さんチ〜それは此松王も親父の賀を祝ふた後で梅も櫻も落花微ちん足もとの明い中早く去れ〳〵ヤア推參な歸るをおのれにならはふかとつめ寄〳〵兄弟三人互ひに殘す意趣遺恨にらんで左右へ、別れ行く。

（末本）茶筌酒の段

別れ行く、春さきは在々の鋤鍬迄も樂〳〵と、あそびがちなる一農、一番村では年古き人にしられし四郎九郎、律義一遍さりえにて菅相亟の御領分、佐太に手輕き下屋敷、お庭の掃除承はり松梅櫻御愛樹に土かい水の養も根が農の鍬仕業我身の老木厭なく幹をこやしの百姓業畑の世話より氣樂なり、堤端の十作が鍬打かたげ門口から四郎九郎殿内にかとはいるを見付けコリヤ十作畑へかイヤ今仕廻て戻つたりや嬶がいふには何やらめでたい祝ひじやてて、大きな重箱に眼へはいる樣な餅七つ、朝茶の鹽にも喰足れどもらはぬよりも忝ない禮もいひたし祝ひとはマア何でござる、サイノ菅相亟樣のふつて湧た御難儀を下に住おら〳〵が身、祝ひどころじやなけれど、せにやならぬさかいで仕るは仕るが世間へも遠慮が有で、彼岸團子程な餅七ツ宛配つたは、此四郎九郎、丁度七十、この春年頭のお禮に登つた時おらが年をお尋れ、七十と申したりや、古

來稀な長生、其上めづらしい三つ子の爺親、禁裏から御扶持下され、悴共は御所の舍人、めでたい〳〵、産れ月、産れ日産れ出た刻限違へず七十の賀を祝へ、其日から名も改てノウ聞かしやれ、伊勢の御師か何ぞの樣に白太夫とお付けなされた、則ちけふが誕生日白黑まんだらかいは掃溜へほつてのけ、けふから白太夫と言ふ程にそふ心得て下され、夫はめでたい序ながら問ましよ、三つ子産と扶持下さる、其謂も聞かしやつたか、サイノ死だ女房が産だ時は邊隣の外聞、ひよんな事じやと思ふたがもつけの幸、三つ子の爺親、一代は作り取の田地三反、日本斗じやないげな、唐迄もそふじやてて、男の子なりや御所の牛飼、女良なれば東童さやら是も御所で仕はろゝ、法式は忝ない物旦那殿は流罪なれど、おらは所も追い立てられず下された田地は其儘そちの嬶も若い程に産すならおらにあやかりやと咄の中途、たどりくるは櫻丸が女房八重、けふは舅の祝ひとて、風呂敷包片手に提げ、嬉しや爰じやと笠取れば、ホヽ櫻丸が女房八重か、早かつた〳〵外の嫁子も揃ふてくるか、マア上つて拘もときや、アイ〳〵まだ皆樣はお出ないか、遲かると氣がせいて、淀堤から三十石の飛乘船の足の早いので草臥もせず早來たが仕合せでござんする、コレ四郎九殿、お客そふなもふいにまよヱヽ四郎九郎さは物覺へがない十作、白太夫じや忘れやつたかいの、イヤ忘れはせぬわいの餅の祝さは格別、名酒呑ればいつ迄も四郎九郎ハレヤレ盛た酒を飲ぬとは但しはまだ飲足ぬかへゝぬけ〳〵と嘘いふわちよおらに酒いつ盛たチヽさつきに盛た樽や德利は目に立つゆへ餅の上へ茶筌の先で酒搥打てやつたので二度の祝ひ濟だじやないかヱヽそれで聞へた、嬶が酒くさい餅じやと言た、外へは遠慮でそふ仕やろとおらは日來懇だけ、晩にきて寢酒一杯お客是にと出て行、嫁ん女アレ聞きやつたか、今の世の人はきめごまかで、おらが始末の手目見付けて、晩にきて寢酒たべふ、ハヽヽヽアヽせち賢い懇ぶり、イヤ又お前も餘りな聞きも及ばぬ茶筌酒、ホヽヽヽハヽヽと嫁と舅の睦じさ、梅王松王兄弟の女房がくる道草も、女

子の手業笠に摘みこむ蒲公英、嫁菜狗犯の垣根を目印にサア爰ちやおはる樣、マア先きへイヤお千代さんからと、相嫁同士が門での辭儀合、白太夫おかしがり、一時に產だ三つ子の嫁共先の後の所かい、八重がとふから待て居やる、どちこちなしにはいれ〳〵、ほんに八重樣はやかつたござんする道なれば、はるが所へ誘ふても下さんしよかと、待た程が遲なはつて心せきな道すがら千代樣に行き合ふて連立て來る道てんごう、けふの祝ひのしたしにと嫁菜、蒲公英二人の仕業夫はよふ氣がついた、はる樣誘ふ約束も、日足のたけた氣ぜきして寄る事も忘れたに、お千代樣とはよいお出合、サイナおはる樣に逢たはわしが仕合せ、賑かな道連それはそれぢやが親父樣御料理の拵へ出來て有かへ、イヤ出來てない、わごちよ達にさす合點、こて〳〵とむつかしい事は入らぬ、けさ搗た餅で雜煮仕や、上置きはしれた昆布、隙の入らぬやうに茹て置た、大根も芋もそこにある勝手は知るまい、ヤアえい〳〵と立上れば、イヤ申、けふの祝ひはお前が目當料理方の出來るまで何にも構はず一寢入なされませ、勝手しられど三人寄つて何もかも取り出す、そふじやてゝ立た次手棚なものおろしてやろ、コレ〳〵是見や、祖父の代から傳はつた根來椀じや、折敷も拾枚、おらが息災なも此椀折敷堅地なとてかんまへて手荒ふ當るな嫁女達、此マア悴共はなぜ遲い來る一斛と体を横にさし枕堅地作りの親仁なり、コレ皆樣何ぼう、あの樣におつしやつても雜煮ばかりでは置かれぬ、飯も焚ざなるまいし何はせいでも鱚鱠、道草の嫁菜お汁によかろ、八重樣ちよ樣頼ます、此はるは飯仕かけふと手んでに俎板摺粉鉢、米かし桶にはかり込み、水入らずの相嫁同士、菜刀取つて切り刻みちよき〳〵〳〵と手品よく、味噌摺る音もにぎはしゝ、白太夫目を覺しコリヤ悴共はまだこぬか、正月から知れて有るおらが祝ひ日、油斷せう筈はないが、アゝ此中誰やらチゝそれ〳〵今いんだ十作が咄しには時平殿の車先きで三人の子供が大喧嘩聞てかさしらしてくれた喧嘩の樣子嬶達はしつて居よ、車先きでの事とあれば、時平殿に奉公する松王が女

房、爰へきて樣子を言やと名指にあふたは千代が迷惑、お祝ひ事の濟まではお前の耳へ入れぬがよいと三人ながら其心、いらぬ事しやべられて隱されれば申します、梅王樣・櫻丸樣二人の翻手にこちの人、日頃の短氣言上つて兄弟喧嘩したが氣遣ひなされますな、三人ながら怪我もなく、其場はそれで濟だれ共、もちやくちやいふて居られます、はる樣八重樣お前方もそふであろ、氣の毒な男の不機嫌、成程〳〵、ちよ樣のいはんす通り、けふの祝ひをいゝ立て兄弟御の仲なをし親御のお詞がゝらいではと、男思ひの壁訴訟、エゝわごりよ達に間たらば知れうと思ふた喧嘩の筋知つて居ても言はぬが、同じ胴腹、一時に生れた悴でも心は別々、よふ似た顔を二タ子といへど、それもそれには極まらぬ、女夫子も有る又顔の似ぬ子も有る、マア大概顔が似れば心もよく似て、兄弟の中もよいものじやがおらが悴共誰が見ても一作とは思はぬ、生ぬるこい櫻丸が顔付、理屈めいた梅王が人相、見るからごふやら根性の惡そふな松王が面がまへ、ヤ千代が傍で龐相いふた氣にかけてたもんな、マア、怪我がなふて嬉しうおりやる、怪我の次手に孫めは健なか、連て來て顔見せいで、ヤアとかふいふ中もふ七ツじやおれが生れたは申の刻限料理も大かた出來たであろ、嫁達膳を出さぬかい、アイ〳〵〳〵刻限の過る迄連合衆はなぜ見へぬ、千代樣八重樣、道までいて見てこまいか、爰で待つとより三人ながらござんせいかふ、マア嫁達何言ふぞい、子供共は來て居るはい。アノ來でちやとは、どこに〳〵、エゝどんな嫁共、そこに居るを得しらぬかい、コレ三本のあの木が子供等、梅王松王櫻丸、顔は殘らず揃ふて有れ、勿体ない菅相亟樣くゝめるやうにいはしやました、生れ日の刻限が違や惡い、祝儀にはかげの膳もすへるならひ、サア〳〵早ふと白太夫が、いふに猶豫もなりがたく俄に盛るやら箸打つやら、椀の向ふの小皿にごまめ、まづ一番に親父樣、是でおすはりなされませと、給仕は元よりならはれど見馴聞馴、擧動ひ、八重が配膳、御所めけり、イヤおれもあそこへいこイヤ土間では冷が上ります、やつぱり爰でと押備

へ、是から面々夫の給仕膳を捧げて庭におり、此梅の木が梅王殿枝ぶりずんと日頃の氣質、八重が連添ふ男ぶり、木ぶりも吉野の櫻丸、是は千代まで添ひ遂る女夫が中の若緑り色も艶々勢ひよい、松王殿で子達も揃ふ、サア親父様目出たふお箸なされませ、ホヽなされふ共〳〵親がいに座が高い、子供共へドレ挨拶、ハテもふそれには及びませぬ、お加減のさめぬ内イヤ〳〵お春そでおじやらぬ、親でも子でも極つたじぎ法と庭におりるもまめやかに樹の前に畏まりイヤ是子供衆、何にもござらず共よふまいつて下されい、親が折角おりての辭宜、辭宜返しがしたふてもいごかれぬはしれて有る爰で〳〵ハヽヽヽ嬶達餅を替やいのと尻もちついて悦び笑ひ、我膳に押直り、箸を取るよりムウ〳〵扨攝梅じや味し〳〵、三人の嫁女達給仕も片いきせぬ樣に、三ばいは喰合點で、おじやらしまするじやなんよへハヽヽヽこりや新しい三方土器誰が持て來ましたぞ、イヤそれは八重樣の、ハテ氣が付て添けない、春も何ぞくれるかい、ほんに忘れておりましたと、扇三本袖土産中の繪は梅松櫻お子達のかづを祝ふて三本ながら末廣がり目出度ふ祝ふて上まする、こりやめでたい添い、中の繪も咄しで知れた、明けて見るに及ばぬ此儘〳〵戴きまするとは機嫌に千代が秋から是は切の有合いでわたしが縫た手筒頭巾、つむりにあはずば縫直さふ、お召しなされて下さんせ、チヽどれも〳〵不足もない心付きなくりやり物、サア盃も濟だは、おれが膳から上てたも、子供等が膳は盛たまヽ、冷たで有らふ盛直してコレ嬶達二人前づヽ喰てたもや、イヱ〳〵私等はまそつと待て、主達が見へてから打並んで祝はひましよ、そんならそれよ、おれば村の氏神樣へ參つて來ませふ、そんならお參りなされませ、チヽ〳〵往きませよ、拵へて置た十二銅そこに有る取てたも、三本の此扇、末廣ふに子供の生先氏神へ頼んだり見せたりせう、ヤア八重はまだ參るまい次手ながら連立ふ、サア〳〵こちへと機嫌よふ表を、

喧嘩の段

豐竹和泉太夫
竹本相生太夫
豐竹島太夫

鶴澤綱右衛門
豐澤猿太郎
鶴澤友衛門
鶴澤清二郎

人形

松王丸　吉田榮三
梅王丸　吉田玉松
千代　吉田文五郎
桐竹紋十郎

（床本）喧嘩の段

さして出て行く、コレ千代様、年寄しやつてももの覺へがよい事こなたさんや此春は氏神様しつて居る、八重様は今も始め、いはしやんすりや其通り、物覺へのよい親御に違ひ、物忘れする子供達、松王殿なぜ遲いぞ、こちの夫もなぜ見へぬ、但しはこぬ氣か、けふ見へいでよいものかいな、それそこへ松王殿マ是女房を立つそに立たして刻限過ぎたを知らずかい、ヤアべり〳〵とかしましい時平様の御用有て夫仕廻ればいごかれぬ、先へ參つて其譯いへと言付たを忘れたか、梅王も櫻丸もまだこぬそふな、親仁殿も内にござらぬ、サア其親父様は八重様を同道で、もちつとさきに氏神參り兄弟衆はまだ見へぬソレ見いな、遲いといふおれは主持ち、梅王も櫻丸も主なしの扶持放され、用もないわろ達が遲いのがほんの遲いの、お春殿そじやないかと詞の端にも殘る意趣、梅王も日脚はたけるせいで來かゝりつゝかう、松王には顏ふり背け、お千代殿けふは太儀コリヤ女共親人と櫻丸、八重も爰にはなぜ居やらぬ、イヤ今も松王様のお尋ね、櫻丸様はまだ見へぬお二人は宮參り、ムゝ櫻丸はどふしてこぬな、ア待兼る者はこいで、胸の悪い見とむない煩がまへと、梅王に當こすられ松王丸逸徹短慮あたぶの悪いれすり言、いひ分有らば直にいやれさ、何のわれに遠慮せう、わが煩がまへを見る度々ゲイ〳〵と虫

唾が出る、ハヽヽヽハレ申したり腹の皮此松王は生れ付て涙もろい、櫻丸やそちが樣に、扶持放されの痩顏い、ひだるからふと思ふてやるが兄弟のよしみ丈おゝ扶持放されと笑ふやつが喰ふ扶持がろくな扶持か鐵丸を食すといへ共心穢れたる人の物を請けずといふ八幡大菩薩の御託宣、心汚れた時平が扶持有がたふ思はな、人でなしの猫畜生ヤア畜生とは舌長な梅王、今一言いふて見よお、ゝ望みなら安い事畜生〳〵ごふ畜生、もふ赦されぬと松王丸刀の柄に手をおくれば松王も反打かへし詰寄つめよる二人の女房、是はマアおとましい氣が違ふたか梅王殿と千代が夫を抱止むれば七十の賀を祝ひに來て親父樣に逢もせず反打てごふさしやる、祝ひ日に拔てよいかこちの人梅王殿と刀の柄にしがみ付く女房春を取て突き退け、七十の賀でも祝ひ日でも堪へ袋のやぶれかぶれ、留立して怪我するな、コリヤ松王後れたな、女房が留るを幸に頻げたに似ぬ腕なしめチヽ留らるゝを幸ひとは、我心に引きくらべて松王には慮外の雜言身か女房が留たよりそちが女房が親にもまだとの一言、肝先へきつと當りこへ〳〵こらへたがもふたまらぬ、眞劍の勝負は親人に逢ての後それまでの腹ひせに砂かぶらせれば堪忍ならぬ、千代に是を預けると兩腰拔てほうり出し裾引からげて身拵へおゝ畜生めがこりやよい了簡、櫻丸が來るまでは松王が命松王に預けると同じく兩腰ほうりすて、双物を渡せば血はあやさぬ、女房共邪魔するなと、すつと寄て縁より下へ踏落せばさそくの松王落ちさまに諸足かけば梅王丸眞逆樣に落重り、摑み合い擲き合い、組んでは放れ離れては又組合い捻じ付け引ふせ蹴つ踏づ、双方力も同年、血氣盛りの根くらべ千代と春とは二人の兩腰、取れもせうかと氣遣ひ半分傍へも寄れず、ハア〳〵〳〵と心をあせり、氣をもみ上けどちらが勝も負もせず擲き合たが二人の存分、梅王殿もふよいわいな松王殿もふおかしやんせ、止て〳〵といふをも聞かず、勝負、つかではむざ働き投げてくれんと松王丸かさにかゝつて押す力、ひろまぬ梅王つゝかへる、肩先ひねつてかつくりさせ横に抱へる松の木腕、劣らぬ肘骨

櫻丸切腹の段

切　竹本土佐太夫
　　野澤吉兵衛

人形

白太夫	吉田小兵吉
松王丸	吉田榮三
梅王丸	吉田玉松
櫻丸	桐竹紋十郎
千代	吉田文五郎
はる	吉田文作
八重	吉田扇太郎

梅の木腕、からみもぢつて、押合ふ力、双方一度にこけかゝり、もたるゝ拍子櫻の立木、土際四五寸殘る木の上はほつきりぐはつさりと折たに驚く相嫁同士、二人が勝負も破角力俱にあきれて手を打掛ひうろつく中へ早下向、アレ親父様のお歸りしや、白太夫様のさいふ聲に二人は肩入れ裾おろし腰刀指す間も、

（床本）　**櫻丸切腹の段**

有らず戻られし年は寄てもこはいは親、上へも上らず大蹲踞けふの御祝儀お目出度いと、祝儀は述ても赤面し塵をひねらぬばかりなり、親はほや〳〵機嫌顔、嬶達が先へ來て七十の賀を祝ふてくれたで、けふの祝ひはさらりとしもた。しれて有る刻限遲いは何ぞ障りが有つてこぬに極めた、梅王松王よふこそ〳〵來てくれた。コレ二嫁女煮くちたで有ふが雜煮祝ばしてたもつたかと折た櫻は見ながらも誰が仕わざぞと咎めもせず呵るところを呵らぬ親、一物ありと知られたり、梅王丸懷中より用意の一通取出し祝儀濟で候へば私の所存の願ひ是に書付け候と親の前に差出せば松王も又一通身の上の願ひ是に有りと同じ所へ直せしはいひ合はせたる如くなり、白太夫打笑ひ心安い親子兄弟夫婦斯並んだ中願ひ有らば口でいはいでぎつとした此書付けさらばおらもぎつとして代官所の格で捌こと願ひ書手に取り上げ、つぶ〳〵讀も口の中、願ひは何やら聞へねど春と千代とは夫の心知つて居る

筈後先きをしられば案じる八重一人三人の兄弟闘争親父様お頼み申し、けふ中直しと言ひ合はした千代様春様こりや何ぞい、何をいふてもこちの人櫻丸殿ござらぬゆへ、心當が皆違ふた道で眩暈がおこつたかと見へぬ男を案じるやら二人の願ひも氣にかゝり小首傾け案じ居る、親父は二通讀仕まい、コリヤ梅王そちが願ひに旅へ立隙くれとは、ムゝ推量するに外でも有るまい菅相亟のござる島か成程〳〵、結構な御殿に引きかへ垣生の小屋の御住居、御用聞く人なければ梅王下つて御奉公仕らん、身のお暇と申けるゝ、ムゝ恩を知らねば人面獣心といふてな、顔は人でも心は畜生、島へ參つて御奉公がしたいとは、まんざら恩を辨へぬ畜生氣は離れた心、コリヤやい御臺様や、若君様おかはりも遊ばされず、ござる所も知れた上旅立の願ひじやな、イヤ御臺様は其以來お目にもかゝらず御座所も存じませぬ、併し女儀の御事なれば若君様とは又格別、菅秀才の御事は慥にといはんとせしが松王を尻目にかけ、慥に所は存ぜれ共息災に御座有る噂さ、ヤイ馬鹿者、大切な菅秀才様息災なを聞たばかりお目にもかゝらず有家もしらず、それで儕忠義が濟か、女儀の身とぬかしおる御臺様は主じやないか、コリヤやい尤御不自由な配所の御住居お傍へ參つて御用を聞く膝行役の奉公は此白太夫がよい役ぢやはて、血氣盛り奉公盛り、菅相亟の所縁と有れば根堀り葉堀り絶さんとて鵜の目鷹の目、油斷ならぬ讒者の所爲すはと言ふ時、身を惜まず御用に立所存はなふて、膝行役願ふは命も惜いか敵がこはいか、旅立ちの願ひ叶はぬ〳〵取上げぬと願書顔へ打付けてはつたと睨む老の腹立、道理至極に梅王夫婦、誤り入つたる風情なり、ヤイ松王そちが願ひを見れば勘當を請たいとなハアハゝゝゝゝ神武天皇様以來珍らしい願ひじやなエ不孝者といはゞ譬のないやつ、餘り珍しい願ひなれば聞届けてくれるぞと親の了簡、ハゝハア忝しと悅ぶ松王勇み立ち親子兄弟の縁を切る所存も間はず赦されしは此松王が主人へ忠義推量有つての事なるべし、ハゝゝゝいかさま口は調法なものぢやな、主人への道立て臍がくれるわい、道

も道に寄つてはな横に取つて行く道を蟹忠義と言はいやい、甲に似せて穴を堀ると、勘當うければ兄弟の縁も離れし時平殿へ敵對ば切つても捨んの所存よな、尤善悪差別なく主へ義は立つにもせい親の心に背くをな、天道に背くといふわい、望み叶へてとらする上は、人外め早歸れ、隙取ば親子の別れ竹箒くらはさふと筋骨立て怒り聲、松王は思ひのまゝ女房こいと引立行く、千代は遉に親兄弟名殘も惜き相嫁の顔を見るめもあかれぬ涙、袂絞つて出て行く、ハヽヤレ嬉しや面倒なやつ片付たヤイそこな馬鹿者、御臺若君の御行衛、尋にいかぬか、うせぬかと是も手づよふきめ付けられそんなら嶋へはサア行所へはおれが行くわい、出て行くをこはがるおはる、八重樣あとで能いやうにお詫言をと言捨て夫婦は門へ白太夫は唾を呑込んで奥へ行く、兄弟夫婦に引別れ取殘されし八重が身の仕廻もつかぬ物思ひ門へ立そに待つ夫思ひがけなき納戸口、刀片手に完爾と笑ひ女房共嘸待つらんと、聲に惝り走り寄り、ヤアいつの間にやら來た共言はず案じる女房を思はぬ仕方、兄弟衆の事に付て親父樣のお腹立、其場へは出もせいでマアなんでこな樣は納戸の内に、エヽこれナア譯を聞かして〳〵と聞たがるこそ道理なれ、暫く有て白太夫挾出しの小脇差、三方に乘せしほ〳〵と出るも老の足弱車、舍人櫻が前に置き用意よくばとく〳〵といふに女房又恂りヤアこりや何じや親父樣櫻丸殿ごふぞいなア、何で死ぬのぢや腹切るのじや切らればならぬ譯ならば未練な根性さぎやしませぬ、こなさんが言はれずば親父樣の只一言案じる胸を伏めてたべお慈悲〳〵と手合せ泣より外の事ぞなきヤア親人に何御苦勞、是まで馴染夫婦の中、所存殘さず言ひ聞かさん某が主人と申すも恐れ多き齋世の君樣、百姓の伜なれ共菅相亟樣の御不便を加へられ親人へは御扶持方、御愛樹の松梅櫻、兄弟が名に象り松王、梅王、櫻丸、憚り有や冥加なや鳥帽子子になし下され御恩は上なき筵地の勤め、三人の其中に櫻丸が身の幸、人間の胤ならぬ竹の園の御所奉公、下々の下たる牛飼舍人、勿体なくも身近く召され、菅相亟の姫君とわりなき

中の御文使ひ、仕課せたが仇となつて讒者の舌に御身の浮名終には謀叛と言ひ立られ、菅原の御家没落是非もなき次第なれば宮姫君の御安堵を見届け義心を現はす我生害けさ早々爰まで來て右の段々生て居られぬ最期の願ひ、きゝ届けて切腹刀、親の手づから下されたはい、女房共我等にかはつてお禮も申し死後の孝行頼むぞと義を立守る夫の詞女房わつと聲を上げ仇なる戀路のお媒介○○様の御悪名相亟様の流され賜ふ其言譯に切る腹なら此八重も生ては居られぬ私は殘つて孝行せいと胴慾にもよふいはれた、それよりはまたむごい腹切禮を申せとは、それが何の禮どころ無理な事いふ手間でいつしよに死とコレ申し女房の願ひ立てたべ、親父様の思案はないか、コレ俯いてばかりゞ〳〵御座らず共よい智慮出して下さりませ、夫の命生死は親父様のお詞次第、お前は悲しうござりませぬか、親の手づから此三方腹切刀は何事ぞと恨つ頼つ身を投げ伏もだへこがるゝ有様はものぐるはしき風情なり、白太夫顔ふり上げ子に死といふ腹切刀、むごい親と思ふいひ譯ではなけれどな、此曉は我身の祝ひ、いつもより早く起門の戸明れば櫻丸ヤレ早ふ來てくれた陸なれば夜通し、但しは船かサアまあこちへと呼入れて様子を聞けば右の次第、白太夫づれが伴には驚き入た健氣者とゞめても聞入れずけふの祝儀仕まふまで、女房が來ても逢はせぬぞ、おれが出ひと言ふまでは納戸の内に隱れて居いと一寸延した命をかばひ助けてよいか悪いかはおらが了簡に及ばず神明の加護に任さんと最前祝儀にくれた扇三本幸繪には梅松櫻子供の行末祈る顔で氏神の祠へ直し置信を取て御圖の立願櫻丸が命乞、中の繪は上から見へぬ三本の此扇、初手に櫻をとらしてたべヘエ〜上らせ賜へと再拜行ぎゝ、取り上げた扇ひらけば梅の花、南無三是は叶はぬ告か神の心を疑ふ御圖の取直しせぬものなれ共助けたいが一つばいで取直す次の扇、今度も違ふて又松の繪頼みも力も落果て下向すりや折た櫻、定業と諦めて腹切刀渡す親、思ひ切て

おりや泣かぬ、そなたもなきやんなヤ、ヤ、ヤ、〜〜〜アレ聞たか女房共、櫻丸が命惜まれて、老人の心づかひ御恩も送らず先達不孝御赦されて下されい下郎ながら恥をしり、義の爲に相果ると三方取て戴くにそもふコレ今が別れかと泣も泣かれぬ夫の覺悟、白太夫目をしばだゝき潔い伜が切腹、介錯は親がする、其刀コレ見やれ、と懐から取出すは願ひ込だる鉦撞木、コレ此刀で介錯すれば未來永劫迷はぬ功力利釵卽是彌陀號と撞木を取て打鳴らす鉦もしとろに南無阿彌陀〳〵南無あみだ〳〵南無阿彌陀〳〵〳〵念佛の聲と諸共に襟押くつろげ九寸五分弓手の脇へ突立れば八重が泣く聲打つ鉦も拍子亂れて南無あみだ〳〵〳〵〳〵右のあばらへ引廻し憚ながら御介錯チ〜介錯と後ろへまはり撞木振り上げ南無阿彌陀佛と打や此世の別れの念佛、九寸五分取直し、喉のくさりを刎切ってかつぱと伏て息絶たり、八重も覺悟も此場をさらず夫の血刀取上る枳殼のかげより梅王夫婦はしり寄てこりや何事と九寸五分もぎ取り捨、親の前に畏りコレ〳〵先程歸れと有りし時表へは出たれど櫻丸がこぬ不思議と、相亟樣の御秘藏有し櫻の折たも詮議もなされぬ、彼是不審に存ずるから裏より忍び立戻り始終の樣子は承はつた、是非に及ばぬあの樹と俱に枯し命の櫻丸、兄弟の最期餘所に見て親人の鉦皷にあわせ、女夫の者が忍びの念佛あつたら若者殺せしと悔む夫婦も聞く親も八重も死なれぬ身のくり言是非も涙に南無阿彌陀佛と鉦打ち納め撞木とかばる杖と笠、白太夫は片時も早く菅相亟の御後墓ひ嶋へ赴く現世の旅立ち、櫻丸が魂魄は未來へ旅立、此亡骸梅王夫婦を賴むぞと、八重が事までつど〳〵に賴む詞の置き土産、冥途のみやげは只念佛、南無阿彌陀佛〳〵〳〵南無阿彌陀佛〳〵〳〵なむあみだ笠打ちかぶり西へ行足十萬億土亡骸送る親送る生ての忠義死したる義心、一樹は枯れし無常の櫻、殘る二樹は松王梅王三つ子の親が住所末世にそれと白太夫、佐太の社の舊跡も神の惠としられけろ。

寺入りの段

竹本文字太夫
野澤勝平

（床本）寺入の段

一字千金二千金、三千世界の寶ぞと教へる人に習ふ子の、中に交はる菅秀才、武部源藏夫婦の者、いたはりかしづき我子ぞと、人目に見せて片山家、芹生の里へ所替、子供集めて讀書の、器用不器用清書を、顏に書く子と手に書くと、人形書く子は頭かく、教へる人は取分けて、世話をかくぞと見えにけり。中に年かさ五作が息子詞コレ皆これ見や、お師匠樣の留守の間に、手習するは大きな損、おりや坊主頭の清書したと、見せるは十五の涎くり、若君はおとなしく詞一日に一字まなべば、三百六十字との教へ、そんな事書かず共、本の清書したがよいと、八つになる子に叱られて、エゝませよ〳〵と指さして、嘲戯かゝるを殘りの子供詞兄弟子に口過す、涎くりめをいがめてやどと、手んで手に壓尺ふり廻す自然天然肩持つも、傳ふる筆の威德かや、主の女房奥より立出で詞又コリヤ例のいさかひか、おさましや〳〵今日に限つて連合の源藏殿、振舞に往てなれば戻りもしれぬ。ほんに〳〵こなた衆で一時の間も待かれる今日は取分け寺入もある筈、晝からは休ます程に、皆繕出して習ふた〳〵。ソリヤ又嬉しや休みぢやと、筆より先に讀聲高く詞いろはに、此中は御人被下、一筆啓上候べくの、男の肩に堺重、文庫机を荷はせて、

妻戸涙　桐竹政龜
下男三助　吉田文作
涎れくり　吉田玉德
小太郎　吉田榮三郎
手習子大ぜい
百姓大ぜい
菅秀才　桐竹紋司
千代　吉田文五郎

人形

悧發らしき女房の、七ツ詰りな子を連れて、頼みませうと云ひ入るゝ、内にもそれと早悟り、こちへお入り遊ばせと、云ふもしとやか、アイアイと、愛に愛持つ女子同士、來た女房は猶笑顔詞私事は此村外れに輕うくらして居る者で御座りまする、此腕白者をお世話なされて下さりよかと、お尋れ申しにおこしましたれば、おこせ世話してやろと、結構なお詞に甘へ、早速連れてさんじました、内方にも御子息樣がござりますげなが、どのお子で御座りますぞ。アイこれが源藏殿の跡取りでござります。コレハ〳〵よいお子樣や、外にも大勢の子達、いかいお世話でござりましよ。アイ御推量なされてくださりませ、シテ寺入は此お子で御座りますか、名はなんと申します。アイ小太郎と申しまして、腕白者で御座ります。イヽヤイヤ氣高いよい御子や、折惡う今日は連合源藏も、振舞に參られました。これはマアお留守かいな、お待ち遠なら私が呼びにまゐりませう。いえ〳〵幸ひ私も參つて來る所があれば、其内にはお歸りで御座りませう、コレ三助、其持てきたもの、あなたの傍へあげませ。アツト答へて堺重、へぎに乘せたる一包、内儀の傍へさし出す詞これはマア〳〵云はれぬ事を、イヤおはもじながら、此子が參つたしるし此堺重は子達への土産、取ひろめて下されませと、云はれど知れし蒸物煮染、我子に世話を燒豆腐、つぶ椎茸の入たるは、奔走子とこそ見えにけれ、詞これはマア何から何まで取り揃へて、御念の入つた事、戻られたら見せませう詞イヤモほんの心ばかり宜しうお頼み申し上げます、コレ小太郎ちよつと隣村迄いて來る程に、おとなしうして待つて居や、惡あがきせまいぞ、御内證樣、往て參じましよ。と表へ出れば詞かゝ樣、私も行きたいと縋り付くを、ふり放し詞嗜めよ、大きな形して跡追ふのか、御らうじませ、まだ頑是がございませぬ。ソリヤ道理いな、ドリヤおばがよい物やりましよ、つい戻つてやらんせと、目で知らすれば、アイ〳〵ついちよつと一走りと、跡追ふ子にも引さるゝ、振かへり見返り

松王首實檢の段

切　竹本津太夫
　　鶴澤友次郎

人形

武部源藏　吉田玉次郎
妻戸濃　桐竹政龜
松王丸　吉田榮三
千代　吉田文五郎
春藤玄蕃　吉田玉幸
御臺所　吉田玉七
菅秀才　桐竹紋司
小太郎　吉田榮三郎
涎れくり　吉田玉德
組子大ぜい
百姓大ぜい
手習子大ぜい

（床本）**松王首實檢の段**（切）

下部、〆引連れ急ぎ行く。どり やこちの子と近付きにと、若君の傍に寄せ、機嫌紛らす折からに、立歸る主の源藏、常にかはりて色青ざめ内入悪く子供を見廻し　詞エヽ氏より育と云ふに、繁華の地と違ひ、いづれを見ても山家育、世話甲斐もなき役に立ずと、思ひありげに見えければ、心ならず女房立寄り　詞いつにない顔色も悪し、振舞の酒機嫌かは知らぬが、山家育は知れてある子供、憎体口は聞えも悪い、殊に今日は約束の子が寺入して居りまする、さがない人と思ふも氣の毒、機嫌直して逢つてやつて下されと、小太郎連れて引合せど、差俯伏いて思案の体、いたいけに手をつかへ　詞お師匠様、今から頼み上げますと、云ふに思はずふりあたのき、きつと見るより暫くは、打守り居たりしが、忽ち面色やはらぎ　詞扨て〳〵器量勝れて氣高い生れ付き、公家高家の御子息と云ふても恐らくはづかしからず、ハテ扨てそなたはよい子ぢやなアと、機嫌直れば女房も　詞何とよい子よい弟子でござんしよが。よい共〳〵上々吉、シテ其連れて來たお袋はいづくに。サアお前の留守なら其間に隣村迄いて來と云ふて。オヽそれもよし〳〵大極上、先づ子供を奥へやり、機嫌よう遊ばし召され、それ皆おひまが出た、小太郎倶に奥へ〳〵と、若君諸共誘はせ、跡先見廻し夫に向ひ　詞最前の顔色は常ならぬ血相、合點の行かぬと思ふた所に、今又あの子を見て打つてかへての機嫌顔、猶もつて合點ゆかず、どうやら様子が

ありさうな、氣遣ひな聞かしてと問へば源藏詞オヽウ氣遣ひな筈、今日村の饗應と偽り、某を庄屋の方へ呼びつけ、時平が家來春藤玄蕃、今一人は菅相丞の御恩をきながら、時平に從ふ松王丸、こいつ病者ながら見分の役と見え、數百人にて追取卷き、汝も方に菅相丞の一子菅秀才我が子としてかくまふ由、訴人あつて明白、急ぎ首打つて出すや否や、但し踏込み請取るふや、返答いかにとのつ引ならぬ手づめ、是非に及ばず首打つて渡さうと請合ふた心は、數多ある寺子の内、いづれなりとも身がはりと、思ふて歸へる道すがら、あれか、これかと指折つても、玉簾の中の誕生と、菰垂の中で育つたとは似ても似付かず、所詮御運の末なるか、いたはしや淺ましやと、屠所の歩みで歸りしが、天道のひかへつよきにや詞あの寺入の子を見れば、萬更烏を鷺とも云はれぬ器量、一旦身がはりで欺き、此場さへ遁れたらば、直に河内へお供する思案、今暫くが大事の場所と、語れば女房、待んせや其松王と云ふ奴は三つ子の内の悪者、若君の顔はよう見知つて居るぞへ、サアそこが一かばちか、生顔と死顔は相好の變る物、面ざし似たる小太郎が首、よもや饗とは思ふまじ、よし又それとあらはれたらば松王めを眞二つ、殘る奴輩切つて捨て、叶はぬ時は若君諸共、死出三途の御供と、胸をすゑたが一つの難儀今にも小太郎が母親迎ひに來たらばなんとせん、此義に當惑、さし當つたは此難儀詞イヤ其事は氣づかひあるな、女同士の口先で、ちよぼくさ欺して見よ。イヤ其手ではゆくまい大事は小事より顯るゝ、ことによつたら母諸共、エーイヤこりややい、若君には替へられぬ、お主の爲を辨へよと、云ふに胸すゑ、さうでござんす、氣よはふては仕損ぜん、鬼になつてと夫婦は突立ち、互に顔を見合せて詞弟子子と云へば我子も同然サア今日に限つて寺入したは、あの子が業か、母御の因果か、報ひはこちが火の車、追付け廻つて來ませうと、妻が歎けば夫も目をすり、せまじき物は宮仕へと、俱に涙にくれ居たる。斯る所へ春藤玄蕃、首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乘物、門口にかき据れば、跡には大勢村の者つきしたがふて申上げます詞皆これ

にゐる者の子供が、手習ひに參って居ります、若取違へ首討れては取返しがなりませぬ、どうぞお戻し下されと願へば玄蕃、ヤアかしましい蠅虫めら詞うぬらが伴の事迄、身共が知つた事か、勝手次第に連失うと、叱りつくれば松王丸、ヤレお待なされ暫くと駕より出るも刀を杖詞憚りながら彼等迚も油斷はならぬ、病中ながら拙者めが見分の役務むるも、外に菅秀才の顔見知りし者なき故、今日の役目仕終すれば、病身の願、御暇下さるべしと、難有き御意の趣き、疎かにはいたされず菅相丞の所縁の者、此村に置くからは、百姓共もぐるになつて銘々が伴に仕立て助けて歸へる手もある事、コリヤやい百姓めら、さは〳〵とぬかさず共一人宛呼び出せ、面あらためて戻してくりよと、のつ引させぬ釘鑓、打てば響けの内には夫婦、兼て覺悟も今更に、胸蠢かす計りなり。表はそれとも白髪の親仁、門口より聲高に、長松よ〳〵と呼出せば、オツト答へて出てくるは腕白顔に墨べつたり、似ても似つかぬ雪と墨、之れではないと許しやる詞岩松は居ぬかと呼ぶ聲に祖父樣、なんぢやとはしこくて出て來る子供のぐわんぜなき、顔は丸顔木みしり茄子、詮議に及ばぬ連うせうと、にらみ付けられ、オヽこわや詞嫁にもくはさぬ此孫を、命の花落のがれしと、祖父が抱へて走り行く。次は十五の涎くり、ぼんよ〳〵と親仁が手招き詞さゝよおれはモウ爰かう抱れていのと、甘へる顔は馬顔で、聲きり〴〵すオヽ泣くな、抱いてやらうと干鮭を猫なで親がくは へ行く詞私が伴は器量よし、お見違へ下さるなと、斷り云ふて呼び出すは、色白々と瓜實顔、こいつ胡亂と引とらへ、見れば首眞黑々〳〵、墨かあざかはしられども、こいつでないと突放す、其外山家、奥在所の子供殘らず呼出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が產した計芋、子ばかりよつて立歸る。スハ身の上と源藏も、妻の戸涙も胴をすゑ、待つま程なく入來る兩人詞ヤア源藏、此玄蕃が目の前で討つて渡そと請合ふた、菅才秀が首サア請取らう早く渡せと手詰の催促、ちつとも憶せず詞かり初ならぬ右大臣の若君かき首、れぢ首にもいたされず、暫

くは御用捨と立上るを松王丸詞ヤア其手はくわぬ、暫しの用捨とひまどらせ遁仕度しても、裏道へは數百人を付け置き、蟻の這出る所もない、生顔と死顔は相好がかはるなど、身代の贋首それもたべぬ、古手な事して後悔すなと云はれて、ぐつとせき上げ詞ヤア入らざる馬鹿念、病ほうけた汝が眼玉がでんぐり返り、逆様眼で見やうはしらず、紛れもなき菅秀才の首追付け見せう。ォゝその舌の根の乾かぬ内に早く討て、さく切れと玄蕃が檻柄、ハッと計りに源藏は胸をすゑてぞ入にける。傍に聞き居る女房は、爰ぞ大事と心も空、檢使は四方八方に、眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し詞ヤア合點のいかぬ、先達つて行んだ餓鬼等は以上八人、机の數が一脚多い、其侭ばとこに居るぞと、見咎められて寺、イヤ寺參りした子がござんす何馬鹿な。ォゝそれ〳〵是が即ち、菅秀才の、お机文庫と、生地を隱した塗机、ざつとさばいて言ひ拔ける詞何にもせよ蹤どころすが油斷の元と玄蕃諸共つッ立上る。こなたは手詰の命の瀬戸際、奥にばつたり首打つ音、はつと女房胸を抱き、ふん込む足も、けしとむ内、武部源藏白臺に首桶乘せてしづ〳〵出で、目通りにさし置き詞是非に及ばず菅秀才の御首、討奉る、云はゞ、大切ない御首性根をすゑてサア松王丸、しつかりと檢分せよと、忍びの鍔元くつろげて、虚と云はゞ切付けん、實と云はゞ助けんと堅唾を呑んでひかえ居るハゝゝゝゝ何人のこれしきに性根所か、今淨玻璃の鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄地極の境、家來衆、源藏夫婦を取卷きめされ、かしこまつたと捕手の人數十手ふつと立かする女房戸涙も身をかため、夫はもとより一生懸命、サア實檢せよ檢分と云ふ一言も命かけ、うしろ付捕手、向ふは曲者、玄蕃は始終眼を配り、爰ぞ絶對絶命と、思ふ内早や首桶引寄せ、ふた引きあけた首は小太郎、贋と云ふたら一討ちと、早拔きかける戸涙は祈願、天道様、佛神様あはれみ給へと女の念力、眼力光らす松王が、ためつ、すがめつ窺ひ見て詞ムウコリヤ菅秀才の首打つたは、まがひなし、相違なしと、云ふに恂り源

藏夫婦、あたりきよろ〳〵見あはせり。檢使の玄蕃は見分の詞證據に、出かした〳〵よく打つた詞褒美にはかくまふた科ゆるしてくれる、イザ松王丸片時も早く時平公へお目にかけん、いかさま、隙どってはお告めもいかゞ、拙者はこれよりおいとまたまはり、病氣保養いたしたし、オヽ役目はすんだ、勝手にせよと、首受取り、玄蕃は館へ松王は、駕にゆられて立歸る。夫婦は門の戸びつしやりしめ、ものをも得云はず、青息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹き出す計りなり、胸なでおろし源藏は、天を拜し、地を拜し詞ハアヽ有難や忝けなや、凡人ならぬ我君の、御聖德が顯はれて、松王めの眼がかすみ、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所、御壽命は萬萬年悅べ女房詞イヤもう、もう大抵の事ぢやござんせぬ、あの松王が目の玉へ、菅相丞樣がはいつてござつたか、但し首が黃金佛ではなかつたか似たと云ふても瓦と金、寶の華の御運開きと餘り嬉しうて涙がこぼれるハアヽ有難や尊やと、悅びいさむ折からに、小太郎が母いきせきと、迎ひと見ゐて門の戸叩き詞寺入の子の母でござんす、今漸〳〵歸りましたと云ふ聲聞くより又惱り、一つ遁れてまた一つ、こりやマア何と、どうせうと、妻が騷げど夫は胴すゑ詞コリヤ最前云ふたは爰の事若君にはかへられぬ、狼狽者めと戸涙を引退け、門の戸ぐわらり引明れば、女は會釋し詞コレはまア〳〵御師匠樣で御座りますか、わるさをお賴み申しますどこに居やるぞお邪魔であらにと、云ふを幸ひ詞イヤ奥に子供と遊んでゐます、連立つて歸られよと、眞顏で云へば詞オそんなら連れて歸りましよと、ずつと通るを後より、只一討と切付くる、女もしれ者ひつばづし、逃げても逃さぬ源藏が、又するどに切付くるを、我子の文庫ではつしとうけ止め詞コレ待つた待たんせコリヤどちうやと、刎る又も用捨なく、又切付くる文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の旗、あらはれ出しはコハいかにと、不思議の思ひに劔もなまり、すゝみかねてぞ見えにける。小太郎が母涙ながら詞若君菅秀才のお身がはり、お役に立てゝ下さつたか、まだ

か樣子が聞きたいと、云ふに惚り、詞シテ〳〵それは得心か。得心なりやこそ此經唯子六字の旗、ムウ、シテ其許は何人の御内證と、尋る内に門口より詞梅は飛び櫻はかる〳〵世の中に、なにとて松はつれなかるらん、女房悦べ、伴はお役に立たぞと、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す、ヤア未練者めと叱りつけ、ずつと通るは松王丸、見るに夫婦は二度惚り、夢か現か夫婦かと、呆れて言葉もなかりしが、武部源藏威儀を正し詞一禮はまず跡の事、これまで敵と思ひし松王、打つて變つた所存はいかに、いぶかしさよと尋ぬれば、オヽ御不審尤、存知の通り我々兄弟三人は、めい〳〵に別れて奉公、情なや此松王は時平公に從ひ親兄弟とも、肉縁切り、御恩請けたる菅相丞樣へ敵對、主命とは云ひ乍ら皆これ此身の因果、何とぞ主從の縁切らんと作病かまへいとまの願ひ、菅秀才の首見たらば、暇やらんと今日の役目、よもや貴殿は討ちはせまい、なれども身がはりに立つべき一子なくんばいかゞせん、爰ぞ御恩の報ずる時と、女房千代と云ひ合せ二人の中の伴をば、先へ廻して此の身替り、詞机の數を改めしも、我子は來たかと心のめど、菅相丞には我性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌を、松はつれない〳〵と、世上の口にかゝる悔しさ推量あれ源藏殿、伴がなくばいつ迄も、人でなしと云はれんに、持つべきものは子なるぞやと、云ふに女房猶せき上げ、草葉のかげで小太郎が、聞いて嬉しう思ひましよ詞もつべきものは子なるとは、あの子が爲によい手向、思へば最前別れた時、いつにない跡追ふたを、叱つた時の其の悲しさ、冥途の旅へ寺入と早虫がしらせたか、隣村

御宴會はづまは

お電話の用は
南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番

四ツ橋

明るいいのじ感・

南一温泉料理へ

のまさなみ
南一温泉料理

へ行くと云ふて、道までいんで見たれ共、子を殺さしにおこして置いてどうまあ内へいなるゝものぞいな死顔なりとも今一度見たさに未練と笑ふて下さんすな包みし祝儀はあの子が香奠四十九日の素物まで持つて寺入さすと云ふ悲しい事が世にあらうか育ちも生れも賤しくば殺す心もあるまいに死ぬる子は媚よしと美しう生れたがかあいやその身の不仕合せ何の因果に疱瘡まで仕舞ふた事ぢやとせき上げて、かつぱと伏して泣きければ、倶に悲しむ戸涙は立寄り詞最前にナ、連合の身がはりと思ひ付いた傍へいて、お師匠様今から頼み上げますと、云ふた時の事思ひ出せば、他人の私さへ骨身が碎ける、親御の身ではお道理と、涙添れば、イヤこれ御内證、コリヤ女房もなんでほへる、覺悟した御身がはり、内で存分ほへたでないか、御夫婦の手前もある、イヤ何源藏殿、申付けてはおこしたれ共、定めて最後の節、未練な死を致したでござらうイヤ若君菅秀才の御身替りと云ひ聞かしたれば、いさぎよう首さしのべ。アノ隱げ遁れもいたさずにナ。につこりと笑ふて。アノ笑いましたか、ムーーーーハーーーーー、出かし居りました、利口な奴、利發な奴けな氣な八つや九つで、親に代つて恩送りお役に立つは孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸御恩も送らず先立し、嘸や草葉のかげよりも、うらやましから、けなりかろ、伜が事を思ふに付け、思ひ出さるゝ〳〵と、流石同腹同性を、忘れかれたる悲歎の涙詞のう其の伯父御に小太郎が、逢ひますわいのと取付て、わつと計に泣き沈む、歎きもれて菅秀才、一間の内より立出で給ひ、我に代ろとしるならば、此悲しみはさせまいに、可愛の者やと御袖を、し

贈答お菓子
げやみお昆布
おかめあり
二ツ井産粟おこし
東京名菓（菊屋）富貴寄

・聲曲愛家用・
美音めあ
入罐きし美
¥ 1.00×0.50×0.30・

文樂座前・・
文樂堂
電南六六九〇

ぼり給へば夫婦ははつと倶にひたすら難有涙、次手乍らに若君様に御みやげと、松王つゝ立ち詞申付けた用意の乗物、早く〳〵と呼ばるにぞ、ハツと答へて家來共、お目通りにかきすゆる。イザ御出でと戸を開けば、菅相丞の御臺所、ノウ母様か我子かと、御親子不思議の御對面、源藏夫婦横手を打ち詞方々と御行衛尋ねしに、いづくにか御座なされし。サレバ〳〵北嵯峨の御隱れ家、時平の家來が聞き出し召捕りにむかふと聞きそれがし山伏の姿となり、危い所奪ひ取つたり、急ぎ河内の國へお供なされ姫君にも御對面、コリヤ〳〵女房詞小太郎が死骸あの乗物へうつし入れ、野邊の送りいとなまん。アイと返事の其中に、戸涙が心得抱いてくる、死骸を網代の乗物へ、乗せて夫婦が上着をされば、あはれや内より覺悟の用意、下に白無垢麻上下心を察して源藏夫婦詞野邊の送りに親の身で子を送る法はなし、我々夫婦が代らんと、立寄れば松王丸詞イヤ〳〵これは我子にあらず、菅秀才の亡体をお供申す、いづれもは、門火〳〵門火と門火をたのみ頼まるゝ、御臺若君諸共に、しやくり上たる御涙冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子をあへなくも、ちりぬる命是非もなやあすの夜誰が添乳せん、らむうゐめ見る親心、合掌と死出の山けこえ合あさきゆめみし心地して、跡は門火にゐひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さして連歸る。

皆様と いつ ち 密接交渉
を持つ 社會映畫の獨占場

帝キネマ直營
辨天座

新口村の段

切　竹本錣太夫
　　豊澤新左衛門

人形

親忠兵衛　孫右衛門　吉田玉次郎
梅川　桐竹紋十郎　吉田扇太郎
八右衛門　吉田甌壽呂
忠三女房　吉田光之助
針立道庵　吉田玉七
鶴掛藤兵衛　桐竹紋太郎
置頭巾　桐竹門造
水右衛門　吉田文之助
小頭　吉田市松
傳がば　吉田覺三郎

切

戀飛脚大和往來

新口村の段

近松巢林子の『冥途の飛脚』を嘗專助、若竹笛躬が改作したのがこの『戀飛脚大和往來』で初演は安永二年十二月で堀江豊竹座、浪華淡路町の飛脚屋渡世の龜屋忠兵衛はふとしたことから新町の遊女槌屋の梅川に馴染み忠兵衛はぞつこん梅川に打込んで金に窮した揚句さる大名の廻送金の封印切をした廉で大罪人となったので梅川と手に手を取つて駈落し新口村の孫右衛門に暇乞をし死場所を求めに行くといふのがこの段で御座あます。

（床本）新口村の段

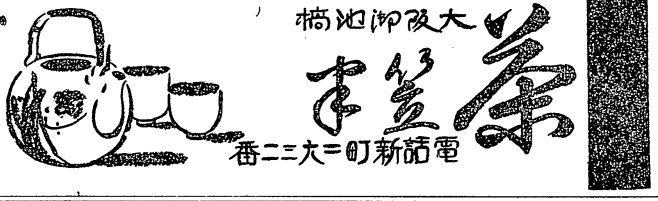
詞節季候だい〳〵、だい〳〵は節季候、おめでたいは節季候。通らしやれ〳〵、親方衆と違ふて、こちとらは水呑百姓、こなた衆にやる米はないわいのと。つことに云はれ、詞こりやひどい、如何樣貰ふ節季候より内の樣子はせく候と、去ぬれば女房は糸ぐるま、正月迄は休まうと、納戸へ取込みおうへの塵、掃出す表へ詞てい古手買紙屑、お内儀樣紙屑はないかな、かーいやな人ぢやわいの京や大阪と違ふて、在所に紙屑はない物ぢや、勝手しらぬ人ぢやそうな町へ出て買わつしやれ、阿呆な人と笑はれて、つぶやきながら見過し、〳〵、歸る程なく同行二人、ぶだらくや岸打波は三熊野の、那智のおやまの詮議とは、人目にそれと白木綿禪衣かけて順禮姿、お嬶樣、火を一

つ借つしやりませ、處は何といふ所かな、爰は大和の新口村、煙草の火は出しませぬ手の内も法度でござんす、アゝけんどな在所だなと、家内をきよろ〳〵ねめ廻し、次の村へと出て行く、詞ほんに今日程うさんらしい者のたんとくろ日はない、納戸這入りも成るまい、ドリヤ夕飯のこしらへと、竈の前に差かゝる。落人の爲かや今は冬かれて、すゝき尾花はなけれ共、世を忍ぶ身の後や前、人目を包む煩かぶり、隱せど色香梅川が、馴ぬ旅路を忠兵衛が、痛はる身さへ雪風に、凍える手先懐に、あたゝめられつ温めつ、石原道を足曳の、大和は爰ぞ古郷の、新口村に着きけるが、詞コレ爰は、わしが生の在所、四五丁行けば實の親孫右衛門殿の所なれど、不通といひ繼母なり、殊に今の身の上を、お目にかけるは大きな不孝、此わらぶきは忠三郎といふて、親達の家來も同然、マア〳〵爰へと門の口詞忠三郎殿内にか、アゝ久しう逢ませぬとつゝと這入れば女房は、詞アゝこちのは今庄屋殿へ、どこからござんして何の用、わしや藪際の次郎兵衛後家の媒酌で、近い頃爰へ來た故、前方の近付は知りませぬが、もし大阪の衆ぢやないかいな、こちの親方孫右衛門様の息子殿、大阪へ養子に行つてけいせいとやらいふ物を澤山買ふて、人の金を盗み、其の傾城を手にさげて、走つたとやらすべつたとやらで、代官所からきつい詮議、孫右衛門様は久離切つて、お上の構ひなけれども、血を分けた親子なれば、いとしや年寄つてきつい案じ、こちの人も馴染故、もしこのあたりうろたへて、見付けられはさしやれぬかと、いかい氣苦勞、庄屋殿から呼には來る、ヤ寄合ぢや印判ぢやと、節季師走に爰あたりは、傾せい事

現代的

電話戎三七五六番

でにえかへる、アゝうたてま傾せいやとしられだ遠慮もなかりけり。二人はハツと胸に釘、打點頭で成程々々、詞大阪でも其の評判、わしらは女夫づれで、年籠の參宮、懐かしさに寄ましたが、立ながらあふて行にたい、大阪者と云はずに、ちよつと呼んで來て下されぬか。かゝ夫は安い事、一かへり行つてきませうが、京のお寺が鎌田村の道場へお下り、先からすぐに參られたもしれまい、夫ではよつぽどわしが戻りも遲い、コレ女中樣、飯がしかけて有る程に、出來損なはぬ樣に、差くべて下さんせやと禮外して出て行く。後は門口はたとしめ、繋金かけてうつとりと、暫し詞もなかりしが、詞コレ忠兵衛樣、ほんに爰は劍の中、斯うして居ても大事ないかへ。アゝいやく、男氣な忠三郎、賴んで今夜は爰に泊り、死ぬる共故郷の土、生の母の墓所、いつしよにうづまれそなたにも、嫁姑と引合せ、未來の對面さしたいと、おろく涙梅川も、それは嬉しうござんせう。去ながら、私もと、樣かゝ樣は、京の六條珠數屋町、定めて此間詮議に合ふて居さんせう、かゝ樣は眩暈持、若もの事は有るまいかと我身のうへより案ぜられ、今一度京の兩親に、一目あふて死たうござんす。詞かゝ道理ぢやく、わしもそなたの親達に、鞭ちやさいふて逢もしたし、恩の有る養子親、妙閑樣や言號の、おすはへも不埒の詫、そなたの兄忠兵衛殿の、志も無にした斷り今一度しみ〳〵あひたいと、人目なければなきじやくる。わたしもたんと恩の有る、兄さんが猶戀しいと、互ひに手を取り抱き合ひ、涙のあられはらく〳〵と、袖にあまつて窓を打つ、詞ハア雪が降さうなと、奥の一間は西受の、反古障子を細目に明け、見



ゆる野風の島道、うしろしぶきの雪吹にはかたけて急ぐ阿彌陀傘、道塲參りぞつゝきける、詞ヤレありや皆在所の知つた衆、先なは樋の口の水右衛門、ひどい呑人ぢやぞい、其次は荷持瘤の傳が婆、こりや又村一番の茶飲ぢやそ、こへ入來る置頭巾は大貧乏であつたが、年貢に詰つて娘を京の島原へ賣つて、よい客に請出され、金持の奥樣に成つて、聟の隆で田も五丁、藏も二ケ所の俄分限、同じ女郎受出しても、わしはそなたの親達に、憂目をかけるが、口惜いわいの。エゝ愚痴な、モシそんな事云て下さんすな〳〵、アノ親仁は弦かけの藤治兵衛八十八で一升の、飯を殘さぬ達者もの、今年はてうど錢百ぢや、其後に仔細らしい坊主は、鍼立の道庵、あいつが鍼で母者人を立殺した、思へば〳〵親の敵。アゝもうよいわいな、今腹たてゝの、何の役に立たぬ事。アゝアレ〳〵、あそこへ見えるが親父樣、此世のわかれ御暇乞、せめて餘所乍らお顔なりと、拜まうと、はら〳〵と爰迄來た念願が叶ふたか、アゝ有がたい〳〵〳〵〳〵、あの縹子の肩衣が、孫右衛門樣かいな、ほんに親子は爭そはれぬ、目元から鼻筋から、お前はよう似た事わいな。詞サア夫程よう似た親と子が、詞さへも得かはさぬは、何とした身の因果、詞アゝお年も寄り足元も弱つて、是が今生のおいとま乞でござりますと、手を合すれば梅川は、今がお顔の見初の見納め、詞私は嫁でござんする、夫婦は今を也知れぬ命、百年の御壽命すぎて後、未來で孝行いたしましよと口の内にて獨語、夫婦諸共手を合せ、兎かく涙にむせび居る。孫右衛門は老足の、休み〳〵門を過ぎ、野口の溝の薄水、すべるを留る高足駄、鼻緒は切れて横樣に、どう

東西大名題の顔合せ

東西合同大歌舞伎

毎日二時開幕　中座　どうぼうとうど

と轉べば南無三と、忠兵衛もがけど出られぬ身、梅川あはて走り出で、抱起しつ裾絞り、詞申し〳〵、どこもいたみは致しませぬかへ、お年寄のあぶない事、お足も洗ひはな緒もすげて上ませう、マア〳〵こちへと手を引いて、内に伴ひ搗り口、腰膝撫ていたはれば、孫右衛門は氣の毒さ、詞アヽ戴きます〳〵。どなたか知らぬが忝ない、お蔭で怪我も致しませなんだ、アヽ若い女中のおやさしい、年寄と思し召て、嫁子もならぬ御介抱、もう〳〵手を洗はしやつてくださりませ、幸ひ庭に葉は澤山、鼻緒はわしがすげますと、懐搜して取出す塵紙。ア申し、爰によい紙がござんす、小搓捻つて上ましよと、延べ紙引さく其手元不思議さうに打守り、詞此邊に見馴ぬ女中、マアこな樣は、此樣に、何誰なれば懇ろにして下さりますと、顔つれ〴〵と眺むれ、ば梅川いとゞ胸つぽらしく、詞ハイ私は旅の者、私の舅の親父樣、丁度お前の年配で、恰好も生寫し、外の人にする奉公とは、さら〳〵もつて存じませぬ、お年寄に舅御の、臥懺みのだきかゝへ、孝行は嫁の役、御用に立つて嬉しい物、詞嘸連合は飛立つ樣にござりましよ、其紙と此紙とかへて、私も申し請、連合の肌に付けさせて、爺御に似た親父樣の筐にさせたうござんすと、塵紙袖におし包む、涙にそれとはしられけり。詞の端に孫右衛門、扨はさうかと恩愛の、盡ぬ涙を押隱し、詞フウこなたの舅に、此親父が似たといふこの孝行が、エ嬉しうござるが腹が立ちます、わしも年たけの伜めを、樣子有つて久離切り、大阪へ養子にやつたが、傾城といふ魔がさして、人の金を盜んだとやら、あぐくに所を走つた噂、此大和は生國なれば、十七軒の飛脚

つねに新鮮な
松竹座

所謂松竹座風なる現代空氣の尖端を往くその清新にお親しみくださいまし。

映畫とレヴュウ

屋仲間、お上からも隠し目付、或は順禮古手買、節季候に迄身をやつし、此在所は詮議最中、誰故なれば其傾城の嫁御故、近頃愚痴な事なれど、世のたとへにもいふ通り盗する子は憎うなうて、縄かける人が恨めしいとは此事、詞久離切つた親子なれば、よからうが悪からうが、構はぬ事とは思へ共、大阪へ養子に行つて、利發で器用で身をもつて、身代もよう仕上げた、あの様な子を勘當した、親は大きな白痴者と、指差せられ笑はれたら、其嬉しさはどう有う。

詞今にもつい捜し出され、縄かゝつて引るゝ、時孫右衛門は目水晶、よう勘當した出かしたと、誉られるのが悲しうござる、それを思へば一日も、早う往生をおすくひと拝顧ふは今まゐる如來様、御開山、コレマ佛に嘘がつかれうかと、どうとひれ伏しもだへ泣き、梅川も聲を上げ、忠兵衛は障子より、手先を出し伏拝み、身をもみ歎くぞ道理なる。猶も涙を押拭ひ、詞様子聞いたか聞かぬかしらぬが、手を釣出さうとお上の計らひ、養ひ親の妙閑殿、一昨日牢に入れたげな。エゝと夫婦は氣もうろ〳〵、それでつく〳〵思ふには實の親を便にして、もしも忍んで來はせまいか、來たらば何ぼう不便でも、養子親への義理有れば、かくまふ事は扨置いて、親が縄かけ出さればならぬ、あゝどうぞ來てくれればよいが、爰らあたりをまごつきはせまいかと、四年以來逢もせず、なつかしい子の顔を、見ぬ様に〳〵と、雑行ながら神たゝきも不便さから、アゝとはいふ物の、若死にするも人の一生、義理有る親を牢へ入れ、おめ〳〵と逃隠れは、末世末代不幸の悪名、所詮逃れぬ命なら、一日なりと妙閑殿を、早う牢から出すのが孝行、覺悟極めて名乗つて出い

明朗五月に明るい喜劇

志賀廼家淡海一座

晝夜二回
どうとんぼり
浪花座

シタがそれもどうぞ、親の目にかゝらぬ所で縄にかゝつてくれ、エヽ現在血を分けた子に、早う死れと敎へるも浮世の義理か是非もなや、何故前方に内證で、斯々した傾城に、斯うした譯で金が入ると、便宜でもしをつたら、久離切つても親子じや物、隱居の田地を賣立ても、首縄はかけまいに、皆あいつが心から、其の身もせまい苦をしをつて、いとしほなげに嫁御に迄、思ひも寄らぬ憂目を見せ、知音近附親に迄、隱れる樣に身を持ちなし、ろくな死もせぬ樣に、此親はうみ付けぬ、エヽ憎いやつぢやと思へども、かわゆうござると泣しづみ、わけたる血筋ぞ哀なる。涙の隙に巾着より金一包取出し、詞是は京の御本寺樣へ、上げやうと思ふた金なれど、嫁と思ふてやるではない、只今のお禮の爲め是を路銀にちつとなと。遠い所へ往て下されと、渡せば梅川押いたゞき、詞お心付いた此お金、逆樣乍ら戴きます、大阪を立退ても、私が姿目に立てば、借竹輿に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明し、廿日餘りに四拾兩、つかい果して二分殘る、金故大事の忠兵衛樣、科人にしたも私から、嘸憎からうお腹も立うが因果づくと諦てお赦しなされて下さりませ、親子は一世の緣とやら、此世の別れにたつた一目、逢ふて進ぜて下さんせと、奥の障子を明けるを引留め、詞アヽコレ益体もない〳〵、たつた今もいふ通り、譬詞はかはさいでも、顔見合したりや縄かけるか、おれが口から訴人せにや、養ひ親への義理が立ぬ、何ぼ義理が立たい迚、親の手づからどう縄が、かけられうぞいの、御尤でござりま〳〵そんなら顔を見ぬ樣にと、傍に有合手拭取り、泣々後に立迫り、慮外乍らとめんない

五月は

まづ

松竹キネマの

朝日座

の封切映畫を御覽になつてからこよいの話題をつくつて下さい

千鳥、御不自由にはあらうが斯うさへすれば、傍にござつても構はあるまい。オヽオ忝うござる　忝うござる、物云はずと顔見ずと、手先へなと障つたら、そちが本望逢た心、親子一世の暇乞、必ずこなたの連合に、物いはして下さるなと、悦ぶ中に忠兵衛は、嬉しさ餘り馳出でゝ、互に手と手を取かはせど、互に親共我子共、云はずいはれぬ世の義理は、涙湧出る水上に、身を浮く計りに泣かこつ、折から聞ゆる多くの人音、二人を奥へとつきやり〳〵、詞コレ〳〵女中、あの物音は慥に捕人、此裏道の小河を渡り藪をぬければ御所街道早う〳〵と氣をもむ所へ、順禮すがたの八右衛門、利平もともに蛋取眼、役人大勢打つれ立ち詞此内がきぶさいなと、どか〳〵〳〵と込入る所へ、組子一人かけ來り、詞所は長谷の山つゞきに、梅川忠兵衛と名乘る者、休みおつたを追つ取まき、からめとらんといたせ共、中々手に合ひ申さずと、聞くより小頭扨こそ〳〵、來たれ纏けと引かへせば二人も倶に飛んで行く。孫右衛門は飛び立つ嬉しさ、天の助けかたじけないと、裏道見やつて延あがり、詞オヽさうぢや〳〵其道ぢや、ソレ其藪をくゞるなら、切株で足つくなと、屆かぬ聲も子を思ふ、平沙の善知鳥血のなみだ、永き親子の別れには、安かたならでやすき氣も、涙々の三重浮世なり。

喜多村緑郎
河合武雄
十年振り
顔合せに
極め付名
作を上演
正午と五時半

角座

大阪では珍
らしい久方
振りの大新
派です。
清新な舞臺
に恍惚となつて下さい
二回　夜盡

四ツ橋畔より

四月の文樂座

消息日誌

△四月一日

大日蓮記念興行の初日開場

△四月二日

土佐太夫後援聯盟團の總見で實切

△四月八日

伏見大將宮殿下同妃殿下御臺覽あらせらる

當日は日本海員救濟會大阪支部長の柴田知事、關大阪市長、救濟會主事河野孝次郎氏他官民有力者三百名餘の御陪觀を差許されました。

松竹本社は白井社長、白井專務、福井常務等が萬端の御配慮を致し狂言は、

義經千本櫻　道行初音の旅路より川連館の段まで

菅原傳授手習鑑　寺子屋の段

近頃河原の達引　堀川猿廻しの段

御前公演の榮に浴した出演者は

道行初音の旅路（綾、大隅、新左衛門、道八、他）

川連法眼館（駒、重造、古靱、清六、他）

寺子屋（津、友次郎）

堀川（土佐、吉兵衛、團六）

人形は榮三、文五郎をはじめ一同。

△四月九日

大河内子爵御夫妻が住友川田理事の案内で御來觀、紋十郎に就て女形人形の動作に就て說明を聽かれました。夫人は伏見宮妃殿下の御妹君にあらせられるやう川田順氏の御言葉でした。非常に人形に御趣味深いと承はりました。

△四月十三日

久彌大妃宮殿下、東伏見邦英伯が村雲尼公御同列で非公式に御臺臨あらせられま

した。當日は大毎本山社長の御案内で特別公演と臻し、狂言も別建で御臺覽願ひました。御休憩中、白井社長侍立の上、文五郎、榮三、紋十郎を御指名によつて拜謁を賜ひ、靜と忠信の人形を御覽に入れました當日の特別番組は左の通りで御座ゐました。

前「日蓮聖人御法海」法論石の段より佐渡三味堂迄

中「義經千本櫻」道行初音の旅路
川連法眼館の段

切「近頃河原の達引」堀川猿廻しの段

御前公演の光榮に浴した當日の主なる出演者は

土牢の段（大隅・道八）
龍の口の段（鍛、新左衛門）
三味堂の段（津、友次郎）
道行（南部、つばめ、吉彌、廣助等の若手連の掛合）
川連館の段（古靱、清六、駒、重造）
堀川の段（土佐、吉兵衛、團六）
人形は榮三、文五郎他總出演

△四月十六日
冴例の文樂會開催さる。

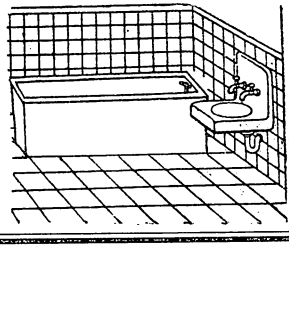
△四月十七日
大審院長が令孃同伴初の文樂見物をなさいました。

△四月十八日
古靱太夫主催の佛立講の御連中約五百餘名の方々が總見されました。

△同　日
明治生命保險會社の方々が春の興樂をこの鄉土藝術に探れて古錦繡の香りに蕩醉されました。

△四月十九日
社團法人信託協會觀劇會開催、財團の鍵を握る一流の方々が五十餘名お揃で御來

化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化裝置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
電話新町（六一二六七六九）
阪急夙川
岡部商會支店
電話西宮一九七六

觀下さいました。

△四月二十四日

獨逸の學究者で世界的の人としてアインシュタイン氏と双び稱されてゐる、エロ研究博士ドクトル、ヒエルシエ・フエルト氏が大阪朝日新聞社を通じて來觀紋十郎氏の手によつておしゆんの人形に就ていろ〳〵説明を聽取し更に自ら操り非常に喜ばれて人形とカメラに入つた。博士の文樂觀は、「世界の凡ゆる人形を見て來たが全く驚嘆させられた世界で一番秀れた鄉土藝術で極致に達したものであるとの事であつた。

△四月廿四日

大阪商船會社の招待で佛蘭西の紳士淑女の一行廿餘名が來觀、人形とキツスをするなど非常に朗らかな面持で喜んで歸られた。

△四月廿六日

日蓮宗に深い關係をもつ明淨高等女學校が同校長の肝入で全校生徒（約六百名）が日蓮劇のマチネーを特に鑑賞した。

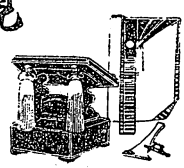
△四月廿六日

本日四月興行大日蓮記念興行を連日滿員の好成績で終演しました。名團体後援會の幹事、諸賢其他愛好者方へ厚く御禮申上ます。

大阪太陽淨瑠璃本座

見物 有益 其他 淨瑠璃道具

電話船場一八六二番



加島屋 竹中商店

大阪市東區唐物町四丁目御堂筋西へ入

文樂座食堂御案内

洋食堂（西館階上）

スピード・ディナー（御定食）	一、五〇
スープ	四〇
フライ（海老、魚）	時價
オムレツ	四〇
コロッケー	四〇
ビーフカツレツ	四〇
チキンカツレツ	四〇
ビーフステーキ（五分間）	五五
カレーライス	三五
チキンライス	四〇
コールドハム	五五
コールドチキン	五五
コールドビーフ	五五
マカロニーチース	四〇
アスパラガス	四〇
サンドウイッチ	四〇
ソーダ水（特製）	二〇
文樂スペッシアル	一、〇〇
ビーフステーキ	

和食堂（西館階下）

吸付辨當	一、〇〇
親子丼	二、〇〇
御食事（五品御飯香物）	二、〇〇
にぎり壽司	五〇〇
ちらし壽司	五〇〇
雀壽司	五〇〇
火卷	三五
鐵だし	三五
赤吸物	二五
菊正宗	三五
特アサヒビール	五〇
ダイヤレモン	三〇
ソーダ水（普通）	一五
紅茶	一〇
ケーキ	一〇
アイスクリーム	二〇

洋酒 お茶

酒場（西館階上）

文樂カクテル	七〇
マンハツタンカクテル	六〇
ドライマテニイ	六〇
アブサンフラツペ	一、〇〇
ミリオンダラー	九〇
ミリオネア	七〇
ウイスキー	各種
コニヤック	各種
リキユール	各種
チーズ	各種
ソーダビスケット	二〇

南一溫泉料理經營

文樂座使用規定

一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ

二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前デモ御使用中デモ御使用ヲ取消シ致シマス

三、當座御使用料金ハ別表ノ通リデアリマス長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス

四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ

但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス

御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出デラレシ時ハ半額御返却申シマス

五、御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用デ必ズ其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス

六、御使用者ノ御希望デ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用デ特別ノ設備モ出來マス

七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス

八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス

九、御使用者ハ當座從業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン

十、當座從業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス

既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任ゼマセヌ

十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

文樂座使用料　（一日）

時間／場所	收容人員	晝（自正午至午後五時）		夜（自午後六時至同十一時）	晝夜（自正午至午後十時）
文樂座	約850人	平日	80圓	100圓	160圓
		土曜	80圓	110圓	170圓
		日曜祭	90圓	110圓	180圓

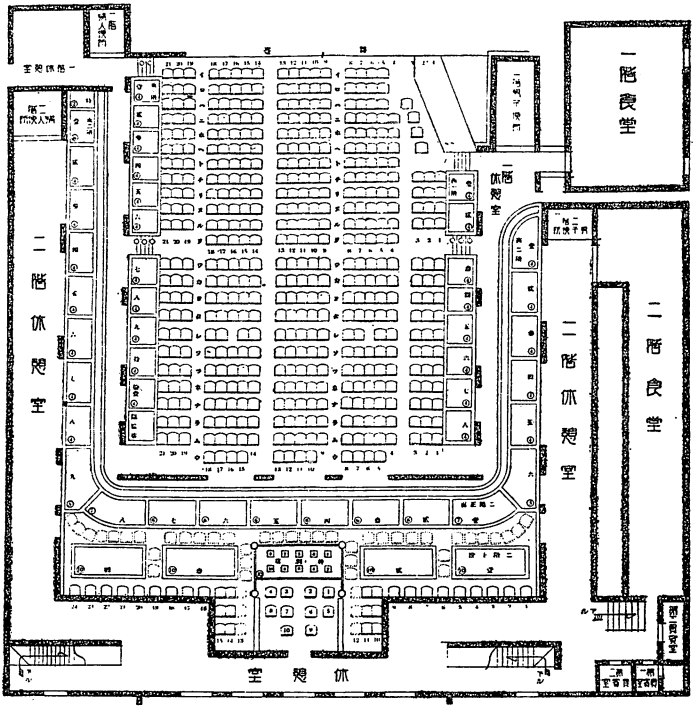
◇上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◇割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器具	備考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同	同　普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺	晝　夜	1回	10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同	晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ	晝　夜	1回	20圓
音樂譜面臺	晝　夜	1臺	10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット	同　大（1000W）　小（500W）	1臺	5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット	100W　500W	1臺	3圓
サスペンションライト	100W　500W	1臺	2圓
フットライト	20W　100W　7球	1本	1圓
ゼラチンペーパー		1枚1回	1圓
大衝立	晝　夜	1對	5圓
演壇設備	同	1回	2圓
其他	必要ニ應ジ實費		
受付2名、案内10名、電話係2名、下足2名	1日1人　1圓宛		16圓
冷風裝置使用料			無料
暖風ラヂエータ使用料			無料

文樂座御席場御案内



御觀覽料の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も右席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尚多人數樣お團体樣のお申込も御相談いたします。

◇文樂座御ひゐき名簿募集◇

一、申込は必ず官製はがきの事。

一、葉書には兩面ともに御住所御芳名を御明記下さい（御住所御芳名の他一切不要）

一、御ひゐき名簿作製の上御芳名に隨つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。

一、會費其他一切申受けません。

一、宛名は大阪市南區四ツ橋　文樂座編輯部宛の事。

文樂座の歴史が全部わかる唯一の文獻

「文樂今昔譚」　特價　金貳　圓

美しいグラフと興味ある好讀物月刊雜誌

道　頓　堀　一部　金三十錢

その色合。その雅趣。

郷土藝術の香ひ溢るゝ

文樂木版手摺繪葉書が

新版發行されました。

春陽會に於て文樂繪に就て定評ある齋藤清二郎氏の作品です

毎月發行　三枚一組美麗なる包裝

一部　金五十錢

お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。廊下及び場内御散策の際は二階西側休憩所前にお化粧室が御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙室を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。充分注意致しますが不可抗力の損傷は何卒御諒承下さい。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行屆の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は場内にて

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

出演者

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所を新設しましたから御使用下さい。

四ツ橋 文樂座
前賣切符專用電話南四七一一番
電話南 七四〇八番 三七八八番

春五月の御集會は

和やかな明るい感じの

大阪の宴會劇場で

文樂座の御宴會

（B）金四圓（御一人様）

一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は快美な『ランチ』
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
床本入り番付つき

（A）金五圓（御一人様）

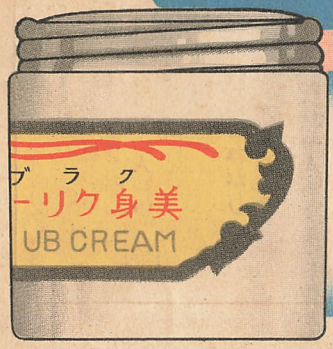
一等椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は皆様本位の御定食
（和食洋食兩様の設備が御座あります）
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ
床本入り番付つき

□お申込は二十人様以上をお請け致します。
□記念撮影のお寫眞は終演と同時にお持歸り出來るやういたしております。
□お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願いたします
□お申込は四ツ橋文樂座事務室（お願ひします。
□お電話の御用は前賣專用南四七一一・三七八八・七四〇八番へ

昭和六年四月三十日印刷
昭和六年五月一日發行
大阪・四ツ橋・文樂座
編輯兼發行人 大塚良三
印刷者 大阪市西區土佐堀通一丁目 永井太三郎
印刷所 大阪市西區土佐堀通一丁目 永井日英堂印刷所

アレ止め日ヤケ止めに一番よい

クラブ美身クリーム

白粉便利

クラブビシン